



親鸞聖人繪詞傳 一



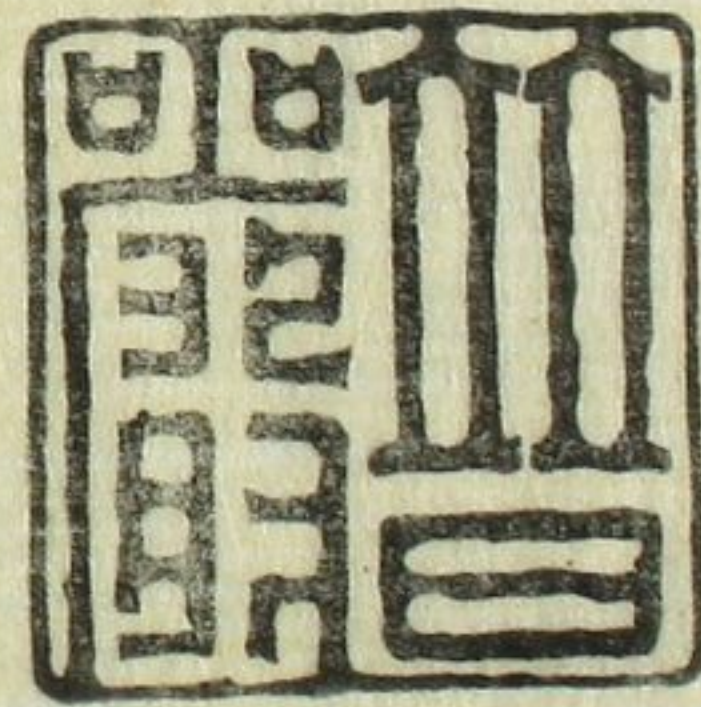
皇和紀傳之有繪詞也
其來尚矣 吉水繪詞
流祖傳繪亦襲之耳
而如其傳繪所載五三
遺漏不少是以我

大法主輪下為使愚夫
愚婦普知流祖行化
之盛近命少僧都舜怒
法眼慧觀等本之紀傳
心者以編次其繪詞鳴

辱鴻慈之至誰不感
戴今茲庚申孟夏其書
功成余雖不類不堪歡
抃聊弁數言為之序
時

寛政十二年夏五月

權僧正真淳謹撰

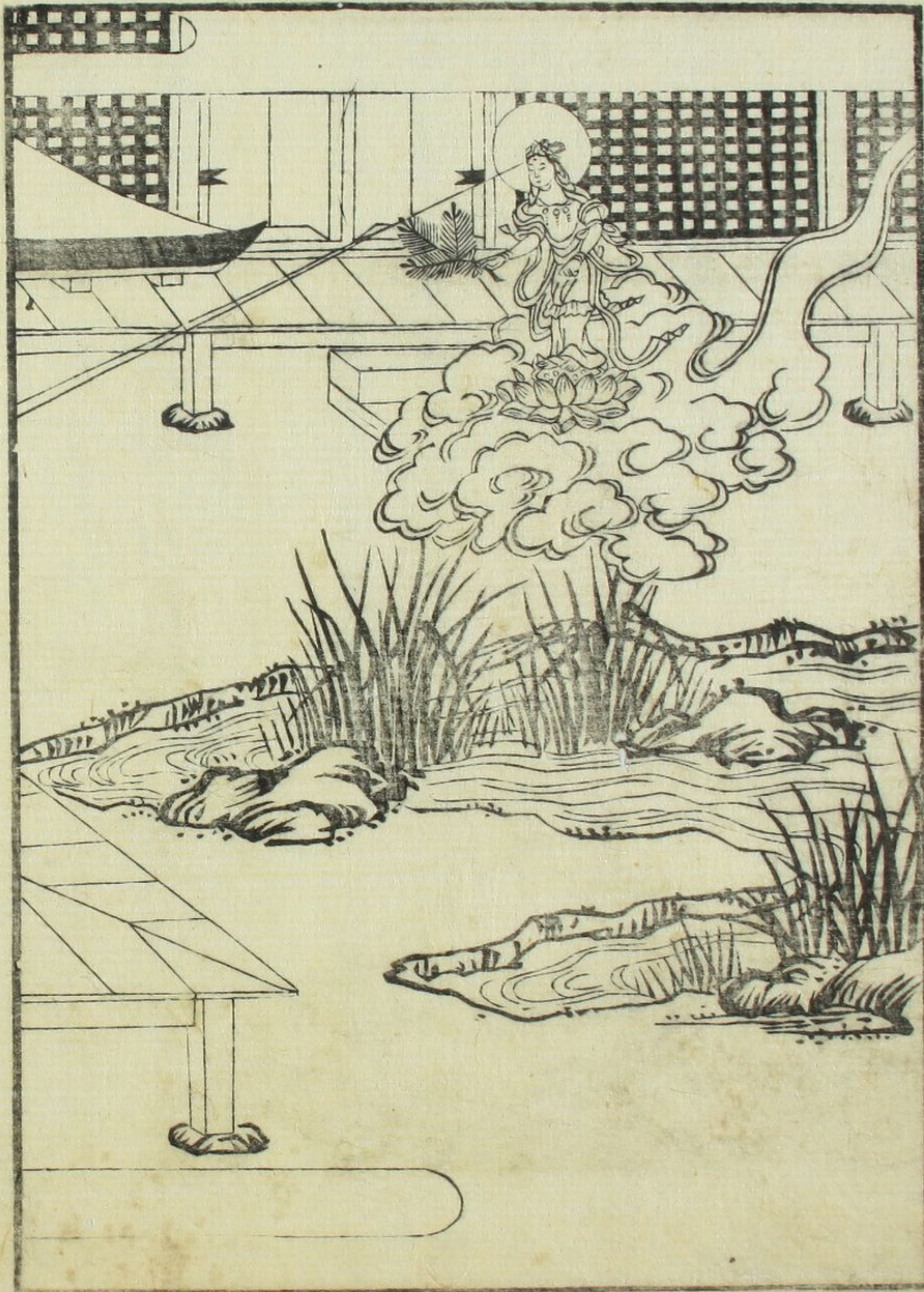
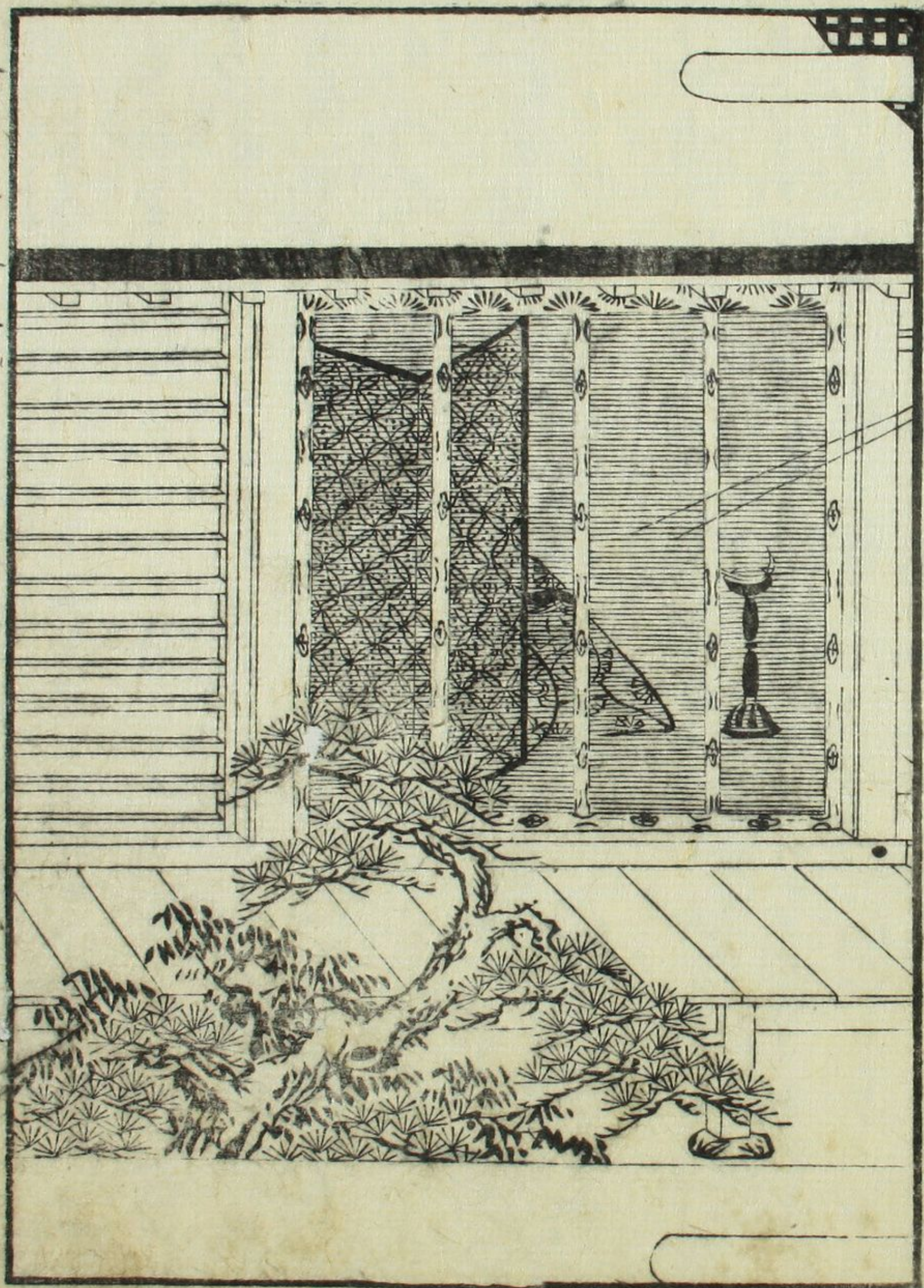


親鸞聖人繪詞傳卷一

昔もく下野國高田山専依寺の開山親鸞聖人の
初は聖道の教法まらびて顕密乃真自以究め
後淨土の真門は入て他力佛乘に宗義と相承
しけひは下野の一流と聞き末世濁乱の衆生
在家思慮の常法のまらびて化益のよ其化
はぐぬ東關よりかる中江京師小び今ハ一
天の如くは誠の性生淨土の先達濁世未
の明師なり遠く至系譜と尋まら天神七代
乃けぬ天御中至尊より四十六代の遠孫より

て天児命より二十八世大職冠藤足より
十八代の南裔前皇太后宮大進有範の息男
也沖母公の源氏より清和天皇七代の孫八幡太
郎義家乃嫡子對馬守義親の息女より沖母公
孝之女より孝之孝之菩提心婦より沖母公
或夜志きりぬ世世に孝之氏親より沖母公
て沖母公の母後の中に西方より金色の芝の
のやききり身返回こも三夜より口中に
入るもあのかしは流ききり西の方見よ
印より此菩薩佛よりすきりてきり斗のふ葉の

松一本は持こは氏撰けく云く吾も如
意福有り汝奇異の思返生せん必ことども
て名くせよや後よりて不思議の行ひはか
るむいしん是より有身より沖母公の
光明の未現の聖人のえれ西方流絶如未の應
現より奉返示の志れより下件_{くだん}の靈_{たま}後
は人王八十代より君のみより兼安二年五月
二日の夜より



聖年癸巳四月朔日二十月中にて誕生す。後
 歩如來滅後二千一百廿二年のあまのまゝりまゝの
 り夏の昔にすせて十八公磨とせ名づけられた
 まひる當年十一月よりく起居歩り
 るふ人と奇異のねのひは形きり
 二歳の秋乃半小沖父有乾乾臣の膝乃た
 ましゆとく六字の名号はせりふも二聲
 音夢まぐわごやうなる事壯人のおく
 是よりくまは法のまくり又うまめは戲
 うも經卷紙取て好一式を念珠とてあそ

び佛号紙唱あまのくせすゆせり
 四歳の沖時二月十二日酉刻十八公磨家
 内み見えたすはざりたればと下驚こころ
 きてくまのく尋求るるに庭の樹
 下にまゆゆて紙練て佛像と送り
 息をたひひて合掌し禮拜恭敬する
 事半時げりなり





同年六月十八日河父有靴靴長年去志多
 夕此河合才淡磨之也伯父三位若狭
 守靴網口の養子と形りなすひぬ靴網御
 之後白川之皇の迎長と博学多才の
 歌人なり
 五歳の時より伯父従四位宗業船長と師と
 して河子男氏けいめなす



七^{なな}茶^{ちや}の春^{はる}範^{のり}綱^{つな}郷^{きょう}の家^{いへ}よわ^わ奇^き乃^の會^{あひ}河^かり^り人^{ひと}
 の^の君^{きみ}み^みり^りて^て欣^{きん}道^{だう}の^の真^ま旨^し氏^{うぢ}範^{のり}綱^{つな}の^の教^け諭^ゆ
 せ^せは^はさ^さる^る氏^{うぢ}十八^{じゅうはち}二^に磨^ま之^の圃^ぼあ^あひ^ひて^てま^ま氏^{うぢ}
 志^しし^しふ^ふと^とふ^ふら^ら範^{のり}綱^{つな}の^のよ^よあ^あら^らひ^ひて^てわ^わら^らひ^ひ
 の^の奇^き書^{しよ}と^とふ^ふき^きん^んと^と欣^{きん}と^とふ^ふく^くら^らふ^ふ
 た^たま^まり^り



八歳の出より伯父三庭の口より南家の儒
生日野氏社忠經より志をこめて孝経論述
沃ふたすひ弘く六経より著りて賢者映雪
の作め怠たすべからず夫子文選の書に
まて著く習熟志をこめて

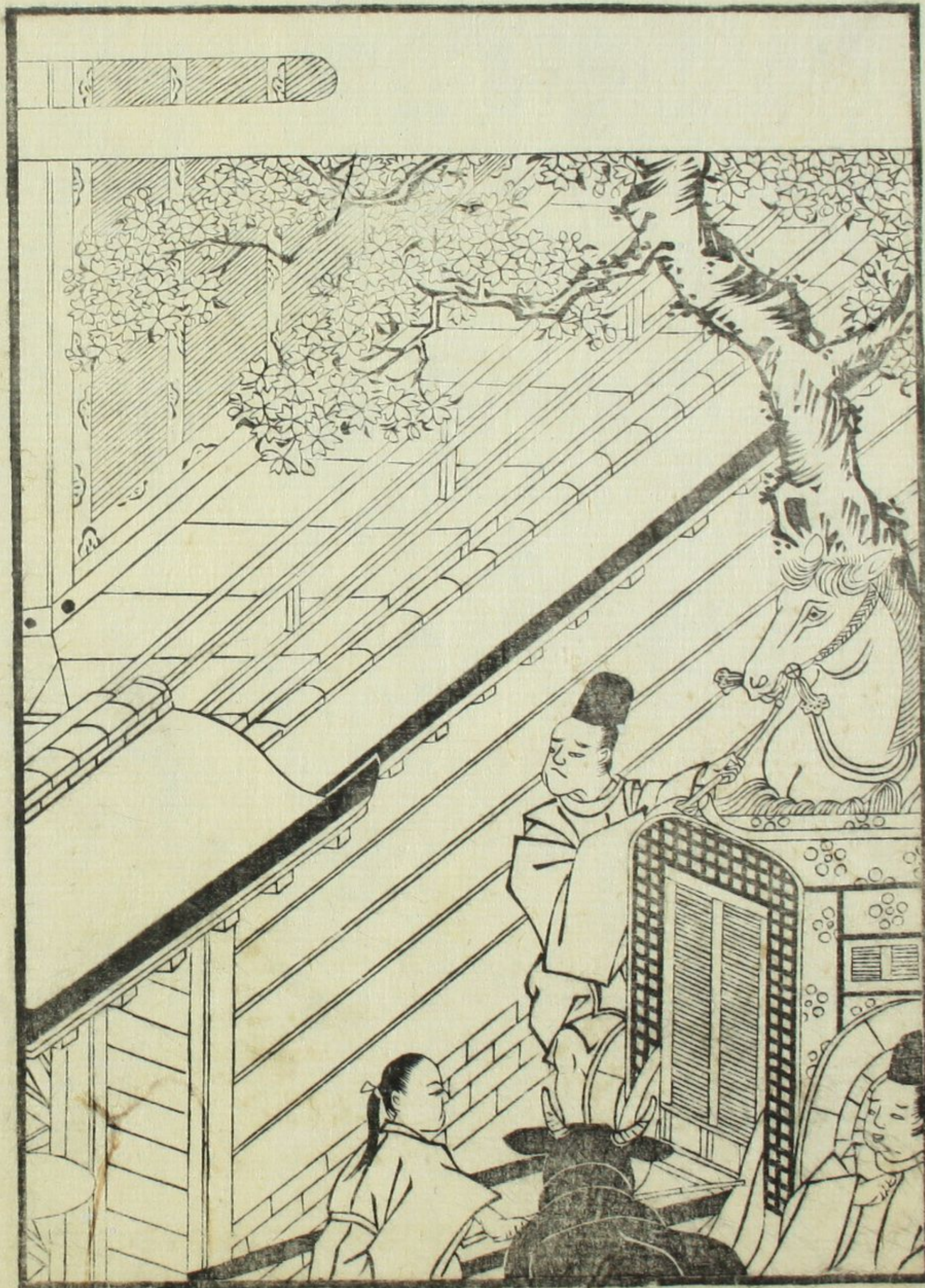
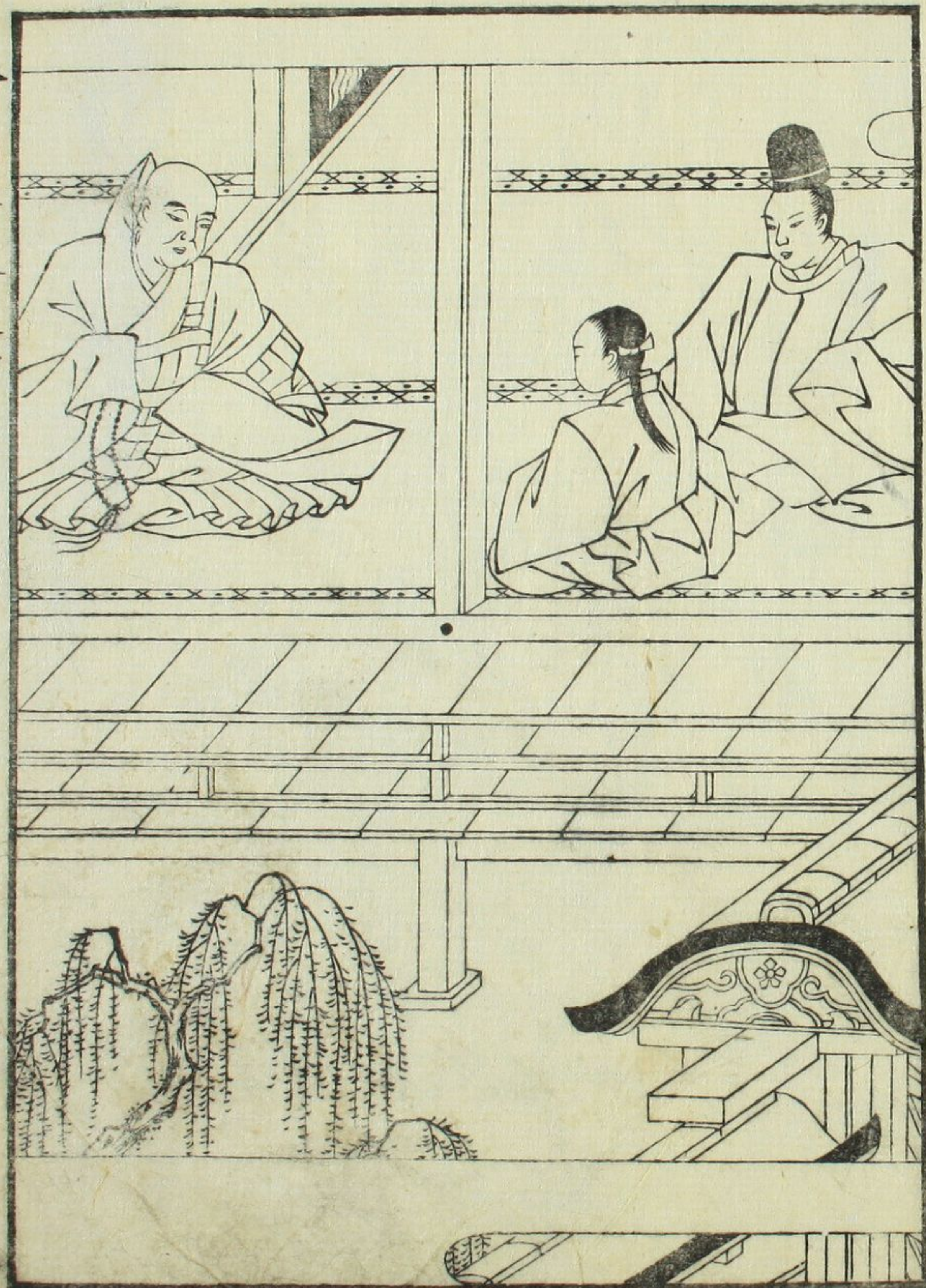
たかどき年五月廿日沖母を去る女とい
ふ風の心持して外より一は終にたかく世
は去る人十八磨沖足才深りとみ悲し
くありて沖身も瘦れりて見えたり
くまの乾綱の宗業の居りて徳をよみ

なぐさ久法華經の中乃の要心沃を
授けしめて是れ母の菩提と昂と
そ孝養の才一たれ何れ悲傷のせん沈
く道もかき取らざらん沖心
くく泣くをたまひてそれより昼夜沃
くば要心沃讀誦一の女之全部を著り
てその末の八種もに必しき福
たかどき時よりお家の沖より
たまひたりて居りて



九峯の春伯父三任乾綱の志はり小出家の生
沃下孫よ乾徳にも十八磨いすまご如稚小
まし海をば今その志神もあがりりといども
壯歳よもりてとぞ意深けは其才とあまする
のし形ば父母の名も辱しめむも下
まづいふも又く終く沖父有乾徳の率
去のみぎり入胎の奇瑞誕生と後のわりと海
浜只い久ぐとて行末にお家とけんごき
肯遺命したまふ事もわり又く性質常人
よ延るも亦もわきばはひよ許諾りて三月

十五日相候ひて浪陽梨田は青蓮院の門
室に入たまひて慈園和尚は拜謁わりて事の
しは具ぬ述ふい杯ぐく速く得たぢも
長く中瓶よゆらん事深評し之くのたまはれ
るも感心わりいけりそののどきと志ある
事實よ宿縁をんたの後のあまばたは
導の道わんめ日すたに剃染かさしめんとの
まのし時十八磨曰生死事大無常迅速
なり影くは今日難深せりわよとて取らん
一首のわすごとく詠吟あたまひたり





河内國破長の里聖徳太子の御廟一系詣り
和尙大日鷲尊一坊のひまからくら及場と
心まきしつれましましん出家せしめあふ戒師を
慈園おあがり沖發とて柱智房阿闍梨
性範せお流さるるもふらら沖名とて改
て法名の苑宴能名の女納之くふりまあふ
日よき奉獻樂よのがりて登壇受戒一
乃申ふ
十歳の春叡山東塔無動寺の大乗院へ入て四
教義と漢くわめあふ句續の師ハ檀小僧部

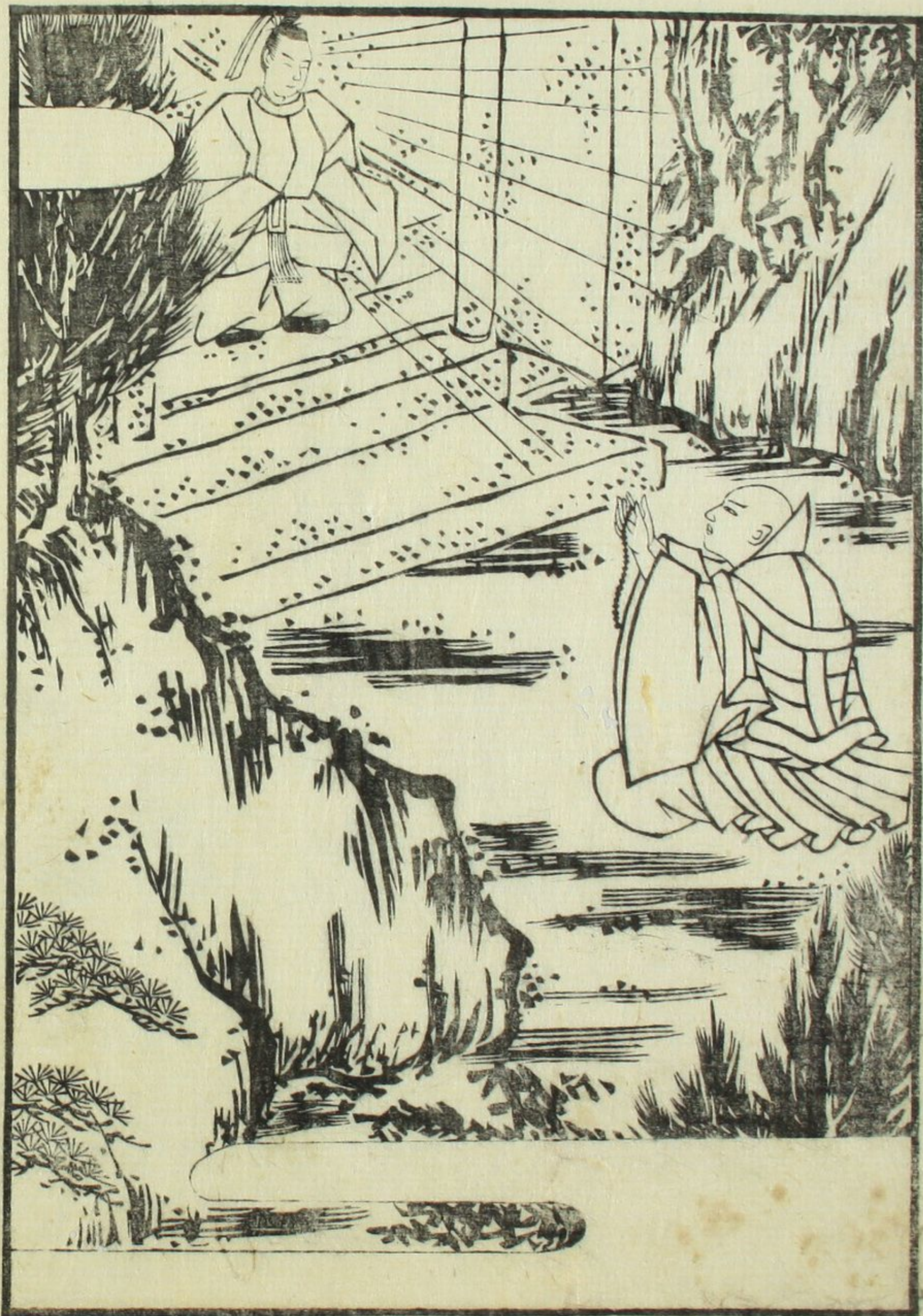
竹林房祥叡なりあうより教ヶ奉の間南江小
嶺の明師と福くき夢く大小志興苑とほく弘く
顯密の深義とまはれたまひける
十九歳七月中旬の比わ州法隆寺一系詣の印を
師のお尚よりあふいばたたり許さん小
たり居ぐて書又範綱より附重とる西合房
侍従とる具してわ州よりおまひさたまひ費運
僧都の坊は還るましく因明志秘奥とまきま
くあふよ奉比序りりて九月十日あまりに
河内國破長の里聖徳太子の御廟一系詣り

たすひ十三日より十六日まで三日沓沓花り
あつた十四日夜丑時夏少もあつて現もあつ
きたわたり聖徳太子沓沓日よりみか
石のとびつた中より光明かくあつて
屋のうらみ照し列よ三満月まじりて
金糸の相現トきて曰

我三尊化塵沙界
諦聽々々我教令
命終速入清浄土

日域大乘相應地
汝命根應十餘歳
善信善信真菩薩

の昔命と得るもいふもあつて
あつたわつた十五日午時のけつわふけ
の文は書紀一あつて中依の正金房の徳心
そつた見もあつたげり形り



二十歳の仲春より南都東大寺まゝに招提
 寺に移りて律と俱舎の真義を聞
 きたり固小般若の理趣分るる巻に
 小般若の書
 写して春日の神社小奉納し
 二十一年正月下旬より二月末に
 横川飯室の妙學坊小因らりて一心三觀
 乃自ら思惟すゆると其定中小惠心僧
 都來つとていひて曰汝ゆとに定
 定は生す
 愈いけと濁息しと退縁を唯淨土の
 業念佛と奉んはめて欣求とす



このゆゑと感見し迄に
 古二歳より二三十年の間ハ河學問の如く
 又學友のお小止親も其溝次ゆゑに
 南都興福寺の經院ニ入て一切經法を見し
 乃ゆゑ又わの夜華嚴經と續涌しゆゑ
 誰ともなく微妙の音聲とて助るすの夢
 と夢ゆゑに是よりすゆく經の蘊奧とゆき
 らめたまふと



在^レ五^ノ祭^ニ二月^ノの比^ノ師^ノの如^ク尚^ニ乃^レ命^ヲ以^テ受^テ小^止親^ト
往^シ生^要集^氏講^堂に^テ和^爲雜^問と^シ設^テ其^ノ
解^會と^シ試^みり^しに^テ乾^宴一^と對^答の^如く^青
天^白日^乃如^しに^テ今^未讀^の妙^亦泉^の涌^が
ど^くな^らば^わる^たに^悦め^しと^ふら^ら奏^聞
以^ひて^小宿^都に^移り^しに^テ聖^光院^の門^跡に^テ
移^して^是を^之の^聖光^院と^シて^青蓮^院兼^帶
の^門室^なれ^ばの^りけ^しひ^たま^しめ^り也^也
建^久九^年戊^午沖^之に^六祭^初之^の以^て戲^山
登^たま^し折^しも^赤山^明神^の寶^前に^詣り^しに^テ法^施

と^河志^乃不^意涌^して^居り^しに^テ瑞^籬の^法に^て
已^に守^りが^らる^女姓^一人^來り^しに^テ志^乃に^けた^り
柳^臺の^み夜^に移^りぬ^きの^二重^{なる}法^亦折^き
て^いく^は大^内に^住む^人と^人を^さる^がら^らは^あく
乾^宴の^所側^近く^しに^テ沖^僧に^いげ^らり^何方^か
一^の山^をあ^りし^人と^も同^じに^テ沖^依小^{あり}る^相換^は
侍^従と^して^八束^り山^に登^りし^にて^女姓^乃
云^ふ妻^も年^未比^戲山^に詣^りし^にて^女姓^乃
今^日も^思へ^り也^也初^ての^路を^とり^しに^テ案^内も
去^りし^にて^一樹^の法^のを^やり^しに^テ多^生の^縁

くやむ心も事もわきまきく今日の心情いごは連
てたまきりひもきりぐくくもさり花宴も
典さあく女性もさば知あぬも埋り花作が
比叡山の舎那園嶺の著るく止観三密乃谷
うくく五の障ある身ハ入事法得あうもそき
法華經も女人ハ垢穢やして佛法の巻よ花と
況もさうりうハ傳教大師結界の地と定めあふ
浦山女も登る花がと泳ぎて飲もあらあふ
きあ人叶ぬ事取宣と只あらりひのうあふ
あはば女性おあふぐくみく扱かたき事と

之は女の如く傳教大師の智志何ぞ一切衆生悲
有佛性も經文と見たまらばや作男女人高
やらぶのびふてあふの山は高きよあふ女
たるものい極らや園嶺の教よ學く女人は
除もあまの魚類も非ぶ一十界十如乃
止観と印り男もた限となふ十界皆成の
成ぶるべ法華の中も女人非慈ははは
づり龍女の成佛の許れり胎氣四曼の中
中も天女は婦人ともやなく三世の佛も四放
乃弟子ハあふぐくうらふが結界の山は

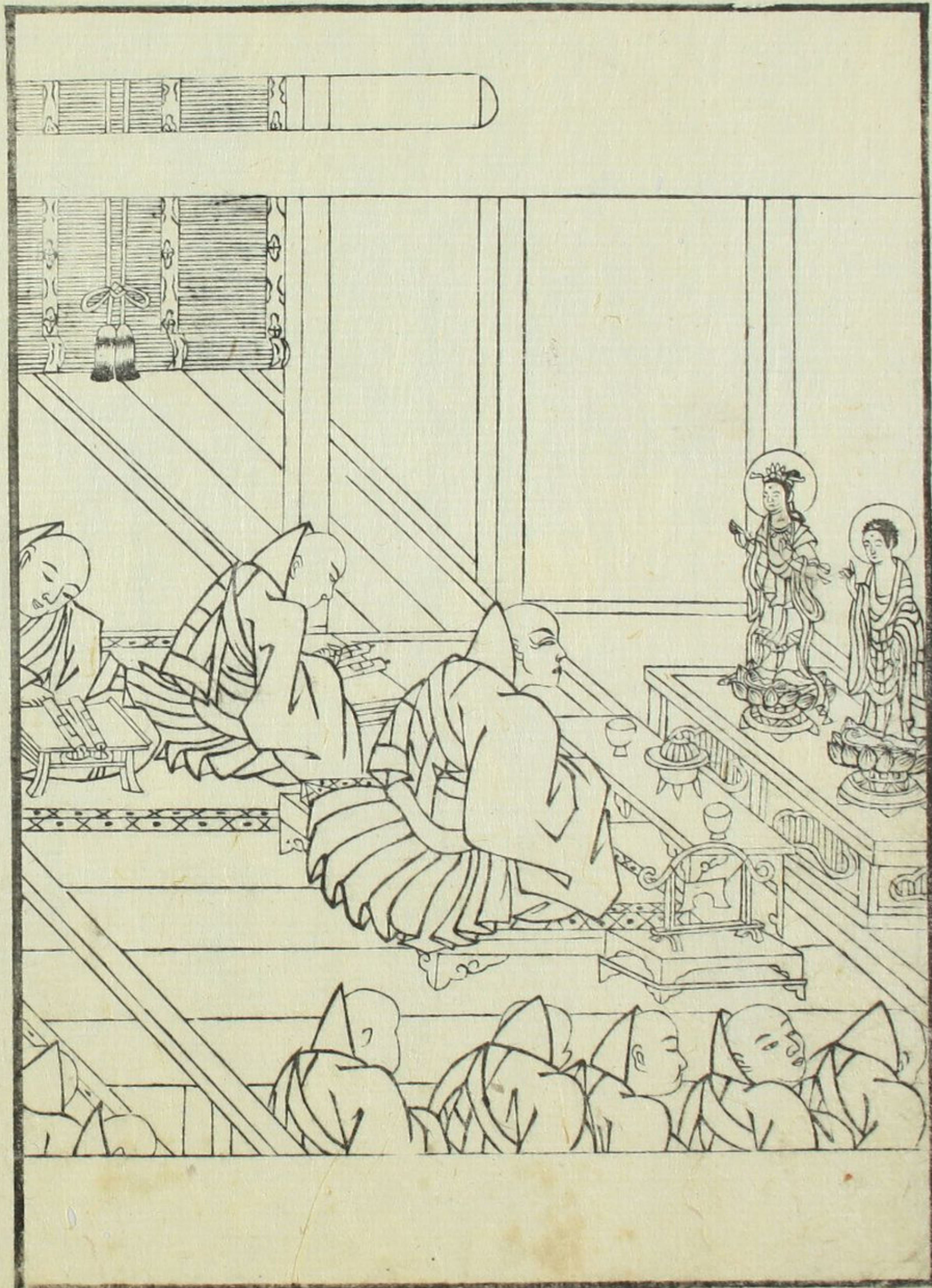
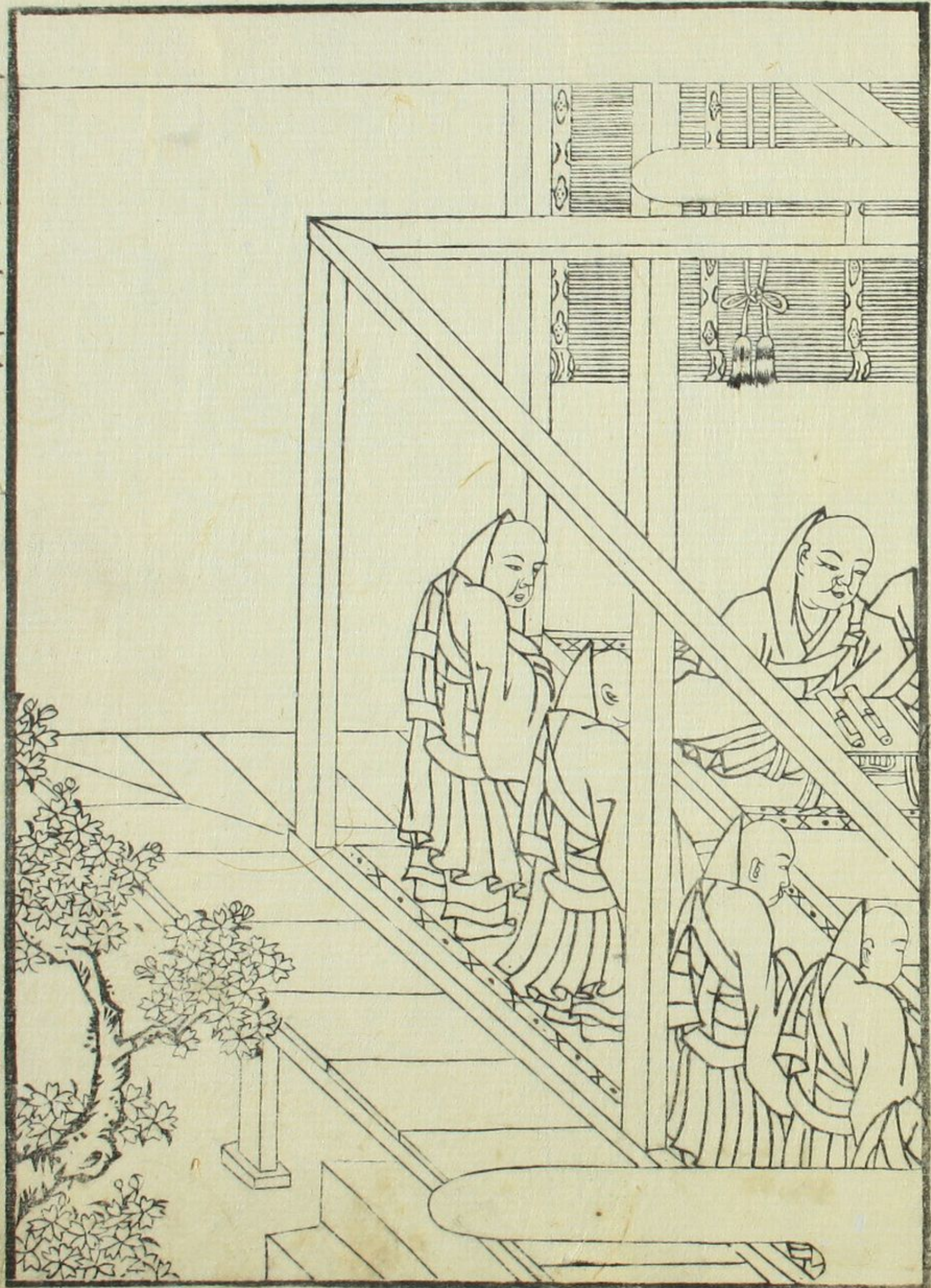
強て登るきすむわん毒中よせり賢知識と
尋て捧んとて聊のそそるおわり今やうば
是は沖傍ふ進ずとて袖より白緒よ色
うらおはおけい玉日此火取の玉なり夫
一天四海の中日輝りるるるるるるるる
石より低く酒きよのなり元玉日の火なり
トて燈炬とる車形酒き土石の玉なり
そそ周夜は思入實ん成り色佛法の言根
乃水とも岩たのし湛る何の徳用り人低
く陋さ岩下とそそ若機と洞と功はあふ

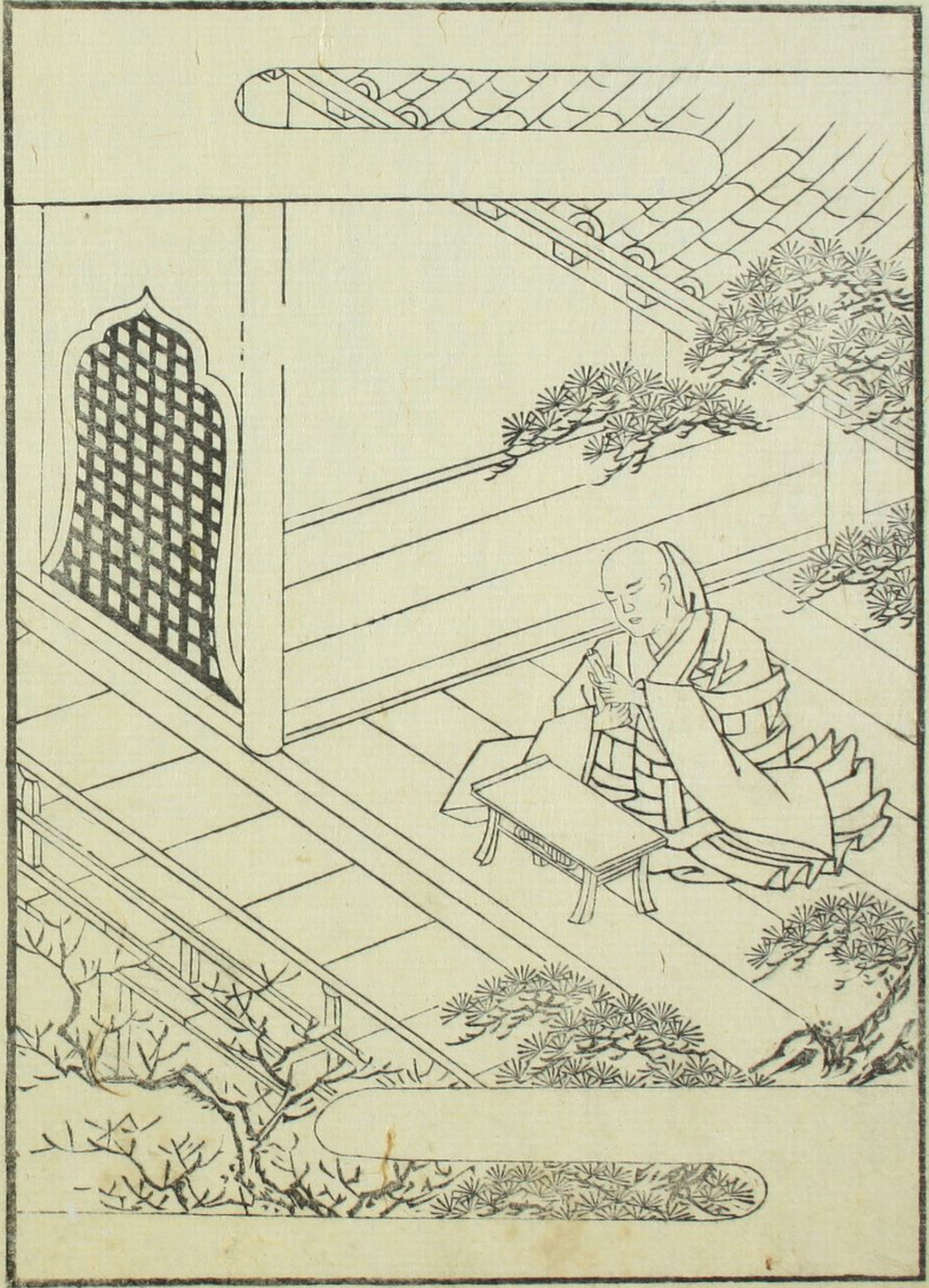
沖僧の表代の智人形なればもは理小達ひたす
くまむく日相おさるの理今ハ知あすト千
日の後には必定しゆくもる車のゆくんそ玉と
バ沖傍ようとて本法よまかくてうせをぬ其
後其九菜の色教下の息女と配偶しあふとそ那の
沖名氏玉目トにそはけきて是れは天日の火
張明玉ふりゆりて一切衆生乃速圓と畢る際
三従の女まで心むぐく引導せよとの教なり
功徳天女とてそそやわりとむ



日どき春深絶秀噴の本像二軀と彫刻して
聖光院に於て彦王慈園和尚に首として
天台乃高僧百口法清ト一七日の間法華の
八講と演したまふに初日ハ國家安泰乃
御祈禱なり中の二日ハ大小の師恩報謝未
の二日ハ先考先妣をびよ養父養母の現當
乃福又擬せ侍り形り其状を記して西塔の一
切経藏と建之しかのありと稱して経藏
のありとしたりたり
古七条正月下旬叡山の東なり山王の神社に首

御系統なりこと御宗問のありたりと志しりた
文殊のまき法探りたり
日牟去の末より安慶後の聖光院法平法
にて玄義文句の真義と問りし聖光院の御宗
にぶまきたり人たりまこと南都東大寺の慈
観得業法に於て空有二宗の深意と尋
びたり
日どき年の冬播州天皇寺小系詣まじりたる子
其等の傍髪経法ありたり





其の春師の如高靴宴法清とて三大法の會
 の旨法述しわ止観の真義法重く試問したまは
 靴宴慈河の各法ゆひ一これと答りて其速
 形る事疾風の如く言法拂ふが如きはわ尚
 大の感歎して汝の言よるが山の神統也とやめ
 且又及の以華嚴と譯せしめたまは法界の
 法よありてな今未聞の妙法法吐のば笑人と
 なは稱養して其のとの良辯傍とてその心
 ねふとて奉の九月は慈園和尚よりわ奇の所使
 とて禁裡ありたまた奉わり柝の起り反

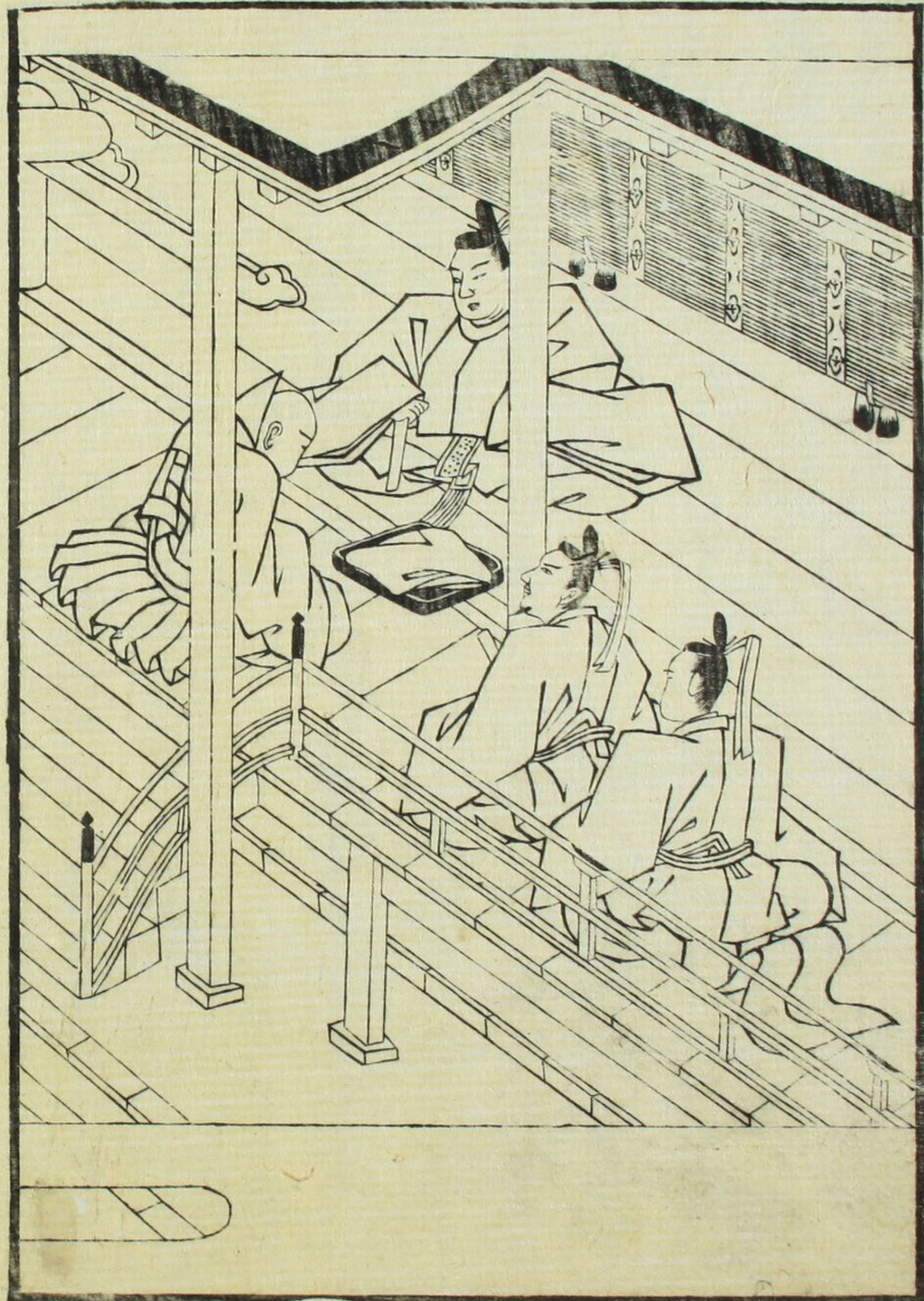
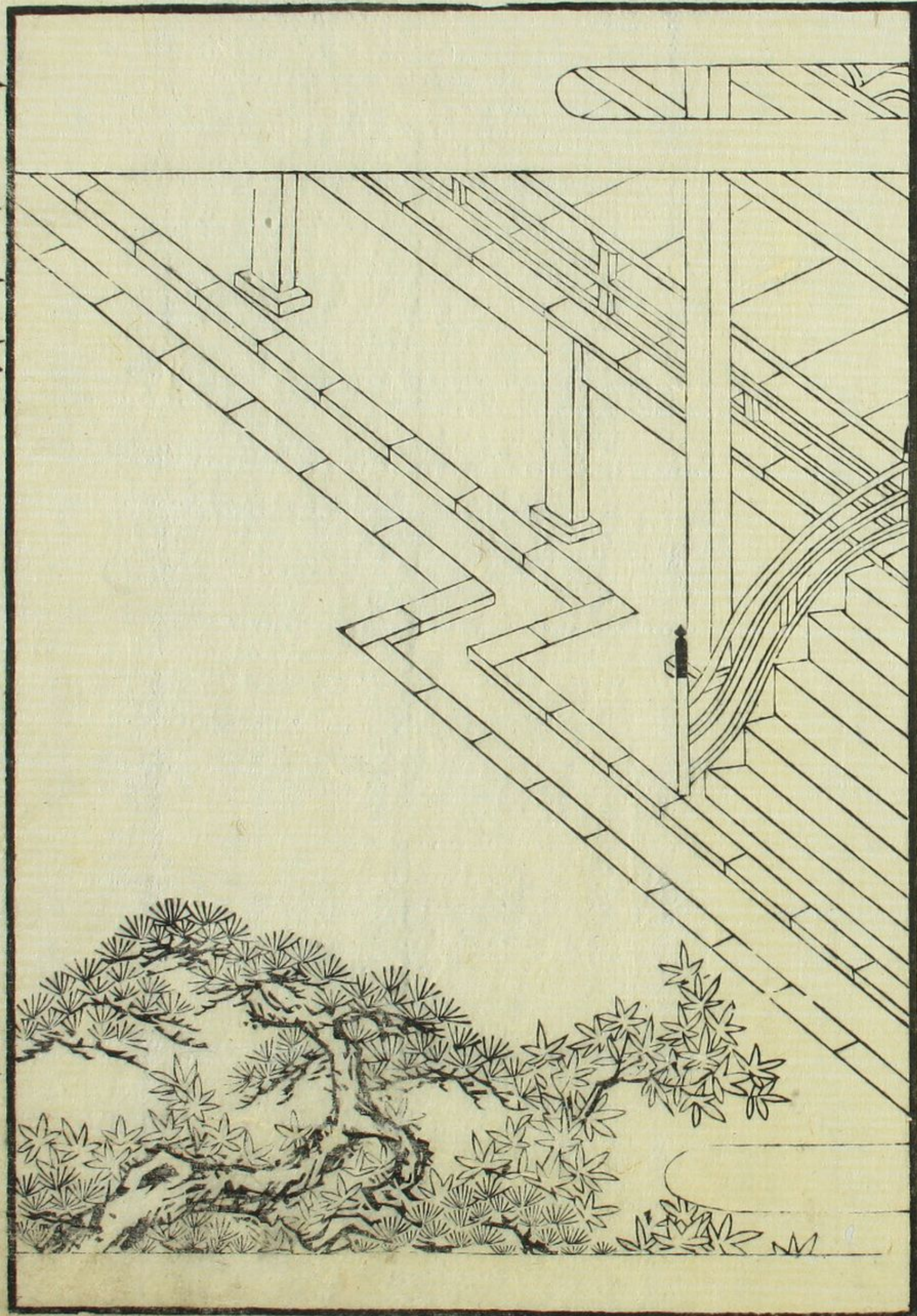
君ゆり小禁裏より衣の題と下は是令歌と
 續てふれりるる付意はわが歌の歌よ
 家老の松氏時の深き終てま首が系風さび
 如法保じて天後ふとあひん是はゆさなる奇
 外一時の秀逸なればそ稱む人々評じて云く
 斗の名奇の意さる牙中でのあひひまうん
 一生不犯の疾さびんどの牙少てなりよりか
 下はれりるる付公心會議ありてさびのりすも信信
 の知まじき事反題少て名奇はませんと
 一してまて書羽をよと云題は下なる所よ

雪梅さび牙少てみれ著書はたはたの意白
 と續てとられりるる下は孝深拍く美は
 云さるるゆりの形して大雅とよま却てわが
 とゆのりは時の御使の信正一生の信沈好れど
 聖光院乃乾真法系下せたまふ乾宴も又教師
 生涯の安否形も進て系内ありたりより社歌の
 使いたせと勅同のり大進有乾が子乾宴女納
 云と奏とそそい書父三位も命り師の信正もさす
 先をさしとて乾宴もさせゆん歌はるまうる下
 師の信正たはたのめと詠しれば乾宴をみ

りのみ氏續ついでとて伴ばんの題だいとなまり
乾宴けんえんいり案あんどたまひて

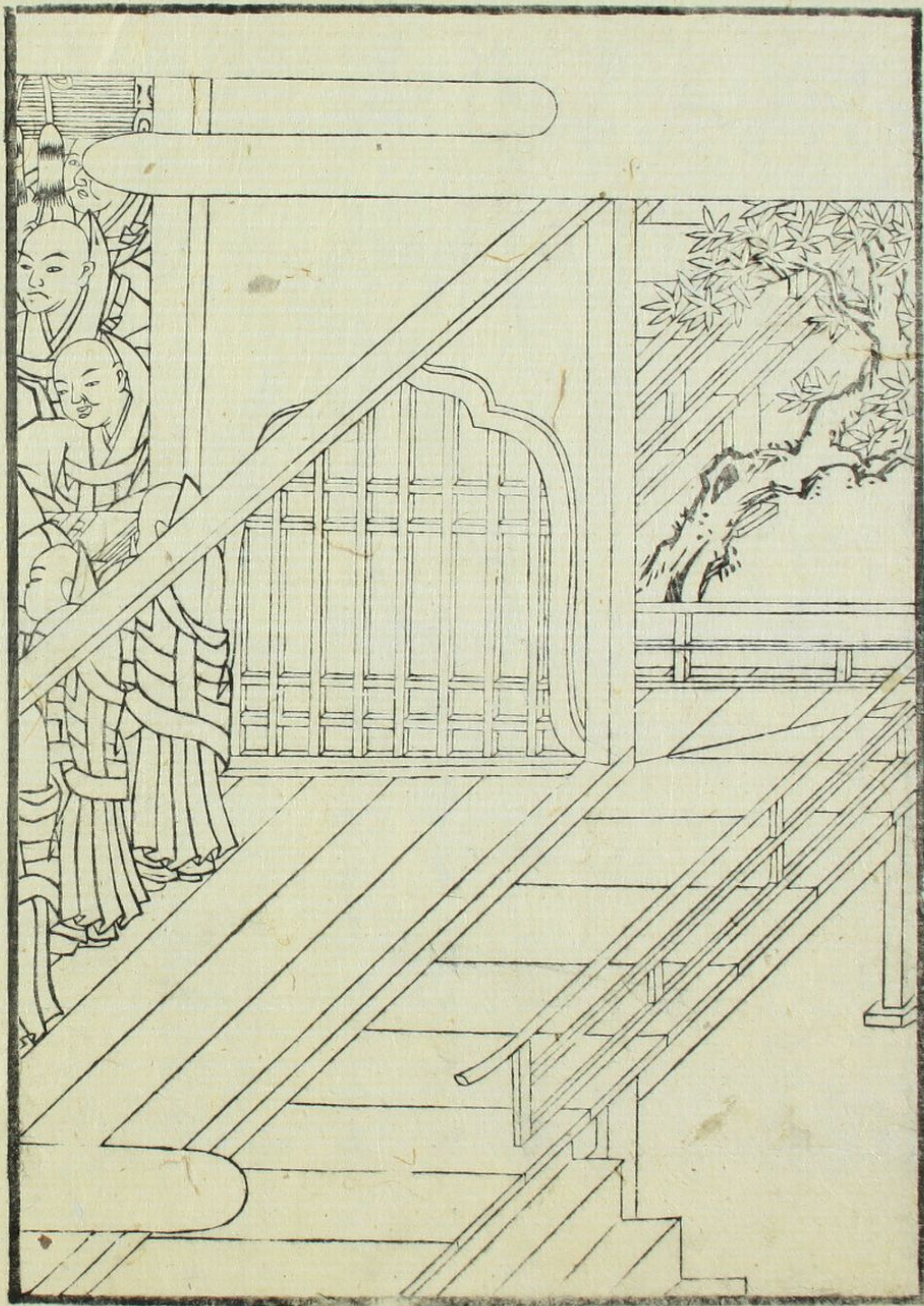
英えい鳥ちう此こゝりのそとのそと吹ふきてたのきき排はい神しんのの旨し言ごん
と讀よみてすりりりななすすひひるるままががとと一い人にんよりり書かき
この公こうのの由よしをを説とくくててすすととがが三さん位いがが表あらわすす慈じ國こくの
才さい子しりりとと大だいなな杯はい矣やとと向むかふふとと所ところ感かんのの條じょうふ
松しょう皮ひ色いろのの少せう能に派はい揚ようりり侍しやく從じゆう三さん位い時とき春はる沖おき服ふく
派はい友とも手て小せう捧ほうてて乾けん宴えんふふかかげげああらられれりり
乾けん宴えん退たい出しゆりりてて及およぶぶ思おもひひららるるとと夜よのの音ねにに
仕し損そんむむららままわわぶぶ師し範はん忠ちゆう父ふのの名な派はいもも下くだすすべべり

我われ天てん名なのの門もん跡あとはは辰たつがが世よ後ごもも衆しゆ回わいららるるととふふららととて
世よのの卷まきよよままららるるををけけしし師しのの傍はたららもも教しやくとのの交まじりり
急いそふふとと疾はやくくのの患うれ難なんもも事ことああららずずとと思おもひひでで道みち世よのの因いん縁えん
ななららむむとと頻まじりりにに道みちのの志しややとと女めののままららるる加か旃せん一いつ
公こう三さん親しんのの公こう乃の水みづ派はい凝ねいたたまますすととふふららとと六ろく派はい糸いと業ごふ
のの浪なみよよららるる初はつきき三さん密みつ瑜ゆ伽がのの胸むね乃の月つき派はいとと有ありり
まますすとともも至し明めい煩ぼん悩なうののままわわくく履かららりり画え世よ乃の九く夫ぶ帝てい
没ぼつのの生せいををままららるるのの行ぎやう行ぎやう後ご人にんややわわくく色いろい
るる形かたちのの師しもも儘ままくく九く夫ぶ直ちやく入にゅうのの法はふ門もん派はいははくくわ
ててららくく生せい派はい濟せいたたせせとと廣くわ大だいのの冲おき意い慈じ心しん



所む時形くせしりくさる
 月どき九月中旬山門の耆宿八十餘人派招請
 て一七日止観の由三昧沃快しゆ導師の慈園和
 尚聲の以下は安居院法平重光竹林房釋嚴僧
 都壽也先考先妣の菩提并ふ喜父母親當の福
 田乃おなりとていまことをいふて道世あるべしれど
 所身朋友の中解波も是とていふるや七日後とて
 翌日の優款の所會ありたり
 日月十七日正金房の庭と中使とて親那法隆寺
 是運傍の方新しき強加察一夜沃始る月

在日仁和寺乃慶法橋の汗（禁多羅傍衣）
 形び又標帽を以給ふハ所文ありと又社中とて船
 隱遁の所形見ゆとていふるやまこと十九某の時を子の
 昔命よ汝命根應十餘某とわとば一も年此
 らに及必遷化形人とていふるやと推察して正
 金房もなしくお所の中使沃始はわらとてな
 中形人



月より奉東塔無動寺の大業院に在りて十月廿日
三七日根中堂と山王七社と毎日毎夜奉誦丹
誠の心祈願ありたり是末代有縁の法と真の知識と
とあり乃心祈誓也爰小師の僧より授け居性乾
と心使うて作らるる九月時にも形を彼の舎宴
もつと思ひゆりたる如く仁和寺一の塔あり事
えゆりていづれもあつたう又三七日勸會をい
え侍らるるをまをさるる一と底と残は人小り
なりと云々靴宴所をのし小祈願を修め志らる
唯父母の菩提乃おとすの事問のるものもいふ也と
新

食の皆をいそぎ形も形をいそぎて修む別
約も福ありと云ふことありし許へありて
と心使ひていそぎるる後二日叡山より
よ青蓮院へ入をたすべし信正の信正は
多して廣縁まで出迎ひ沖を伝はて喜の液
と云ふの如く靴宴も夜の夜と云ひたりたま
夜ハ僧正の許してありたり心おぼれり
二日ゆりありし信正も九月の月情い
と心使ひていそぎるる何と云ふ心全房に
して事の蹟と探図をいそぎるる心使ひ

て聖光院へ入せり
日よき十二月叡山無動寺の大乗院小開ありて
密行の候しるまひあり行法もやとく人をもて
とん又室内にも見せられど正全房の申しり
只いそいなる夜をて不唱戸よまよりて
只寂く孤燈かすに挑て遠く西南の方にひ
結伽使坐して合掌は顔よりて一公不礼小を子
告命の六句の偈又詠唱て悲泣雨泣志あり丹
誠の氣久全儀とも透徹とて沖勢も哀れな
かりたりあり僧心より密行の沖足舞と

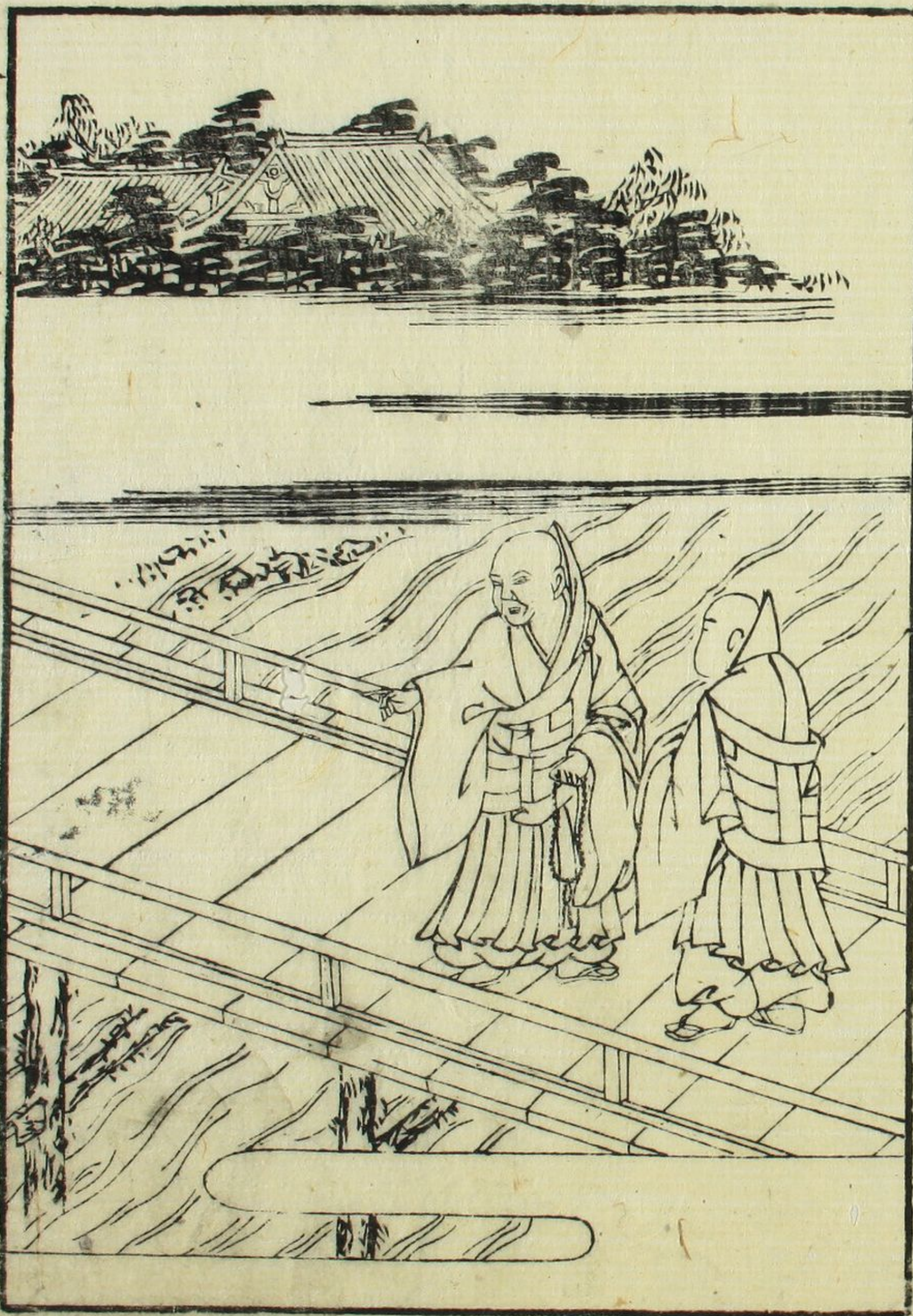
て本懐氏神と宅したまはり下山の時正全房
門外まで送て云うらふと信正の努こりあり
か時田の密行の別の義より唯二年の中沖遷
化と早にたありと見えたり其の是れを
くはくそゆりしが今ハササとて
十九歳を子沖殿その靈告の事と又と夜
密行のありし由沖浦又の極まで妻く後りて互
痛哭しそを別まらるれども信正の共何となく
水たの乃とてやまより別行の二七日とて結
願形りしが其前夜四更の以よ及て室内小光



明のやき無香熏どて如之輪大悲の像現未
 し多の善哉く汝が所願すも小満足せんともあふ
 歎もまことゆ是すとぞぞきたすひる乾宴ハ歎
 喜の涙よじせぞてゆあつく大士の深恩は感
 た多ひはよよりて明年正月より六角堂へ一
 の日をも休むひさらたまふま
 二十九歳正月六日より八月まで聖光院に於て法
 華八講をこひ小正親友三昧沖執のり身師ハ
 慈園僧正結庵ハ叡山の耆宿達也是偏道
 世のいぬ乞と思ふお形り

日月十日より山門の大乗院に隱き大誓願と後
 一京社六角の精舎如意輪觀自在なるに一百員の
 慈多瓜屋して多花籠くよりくもけりき赤
 山遊は毎日小住東して何なる風雨霜雪すもあそ
 多りたまふ事やうそ精誠志すつりて二月十三日
 比條の傍りて中ぎらに安居後法平聖賢まゆり遊
 する上法平河とうあそくろく孝もなぬの孫又見え
 作り何方一ゆりせもよと乾宴も心より教示の
 親わもバの底と街さだ強り小法平をねむ
 期えんむ今東山香水法地房源定聖す

寺に実小一天の心通は海の舟師なりりあくるあ
 許り治て要津と似たまへあしけはに教化と
 うけと日と多る也とトさるる乾安同なるん
 是即ん是師の教に絶びまゝく佛天の靈を
 りく歎喜の法にわたり明日原がて治を心
 とそいそぎ別とそ六角堂へも宿り其夜籠も
 去るあはとん聖光院へゆりて大乗院へも登
 山形

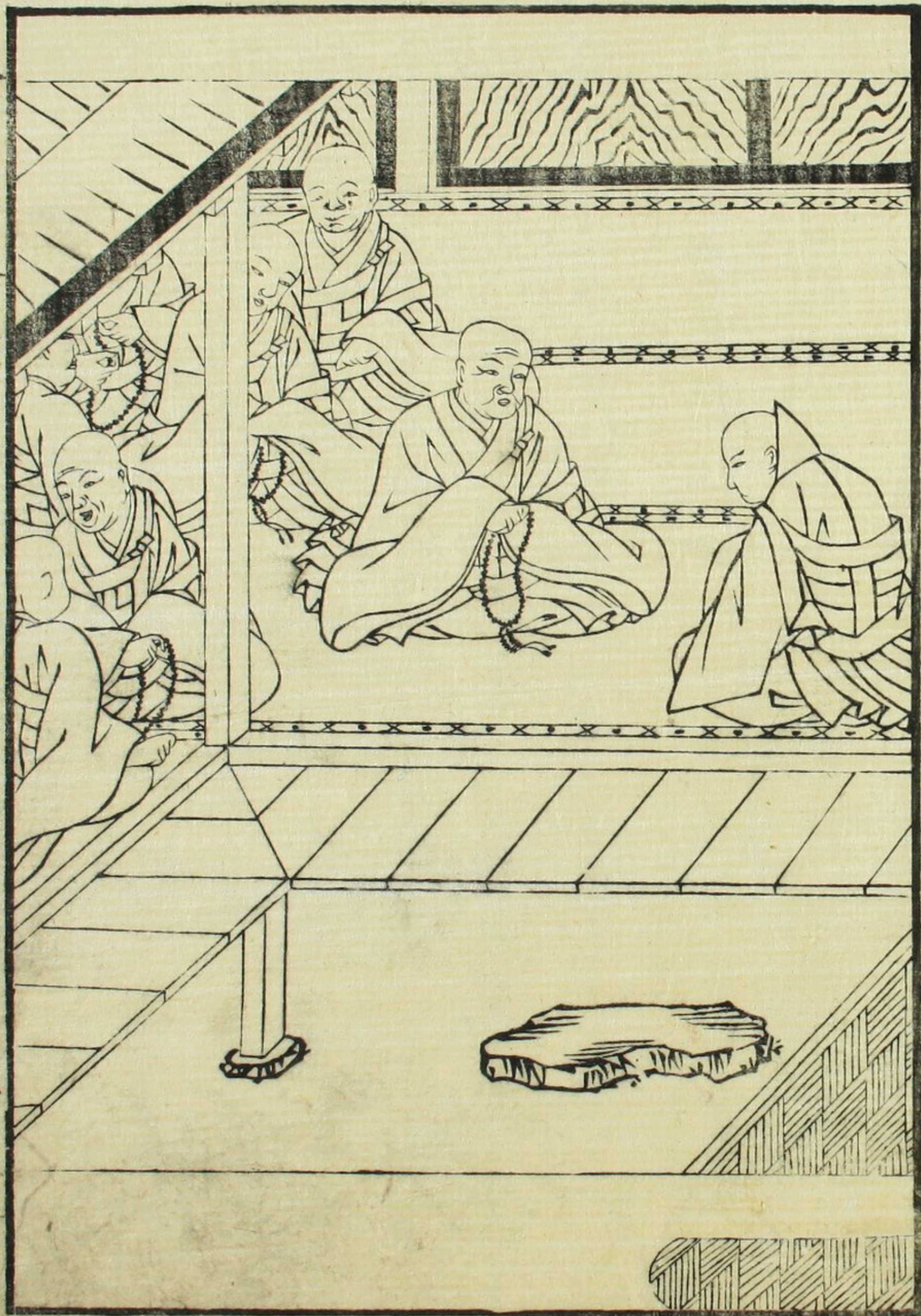


何れも待てて衣水よりむきたまふ
の門跡も半もとるは限や
わごやん白法服用して
人教とて供奉し
水の所坊よりあり
善深の衣きする人
治法尋よりあり
少むり道と出
聖人の福見
と問ふ人

百界千如の深
智赤法揮ひ
皆是聖道
及多法
海られ
深又伏洗
人目も
取
許
深
衣
水
より
む
きた
ま
ふ
の
門
跡
も
半
も
と
る
は
限
や
わ
ご
や
ん
白
法
服
用
し
て
人
教
と
て
供
奉
し
水
の
所
坊
よ
り
あ
り
善
深
の
衣
き
す
る
人
治
法
尋
よ
り
あ
り
少
む
り
道
と
出
聖
人
の
福
見
と
問
ふ
人

む日未の高嶺をた満して立地は他力捨遣の
深なるは交得し能くも凡夫垂入のまはは交遣し
てとるるし沖舟子の教は加たはるまをそ承く自
力難ゆの小治法捨て他力易行の大道小し一向
専念の行者を成り成るひる心名はも改めたまはる
るしと清きわりのるまは空受より練空と後なる
る中が門人多き中よるるに自力の執法は捨てを
多し他力門は故し遂は降るのまは指ぐと意
探ゆ道練禪師の傳法のまはうとぞと仰と
さ下の一文字はまはるる現師の沖津なまはるる

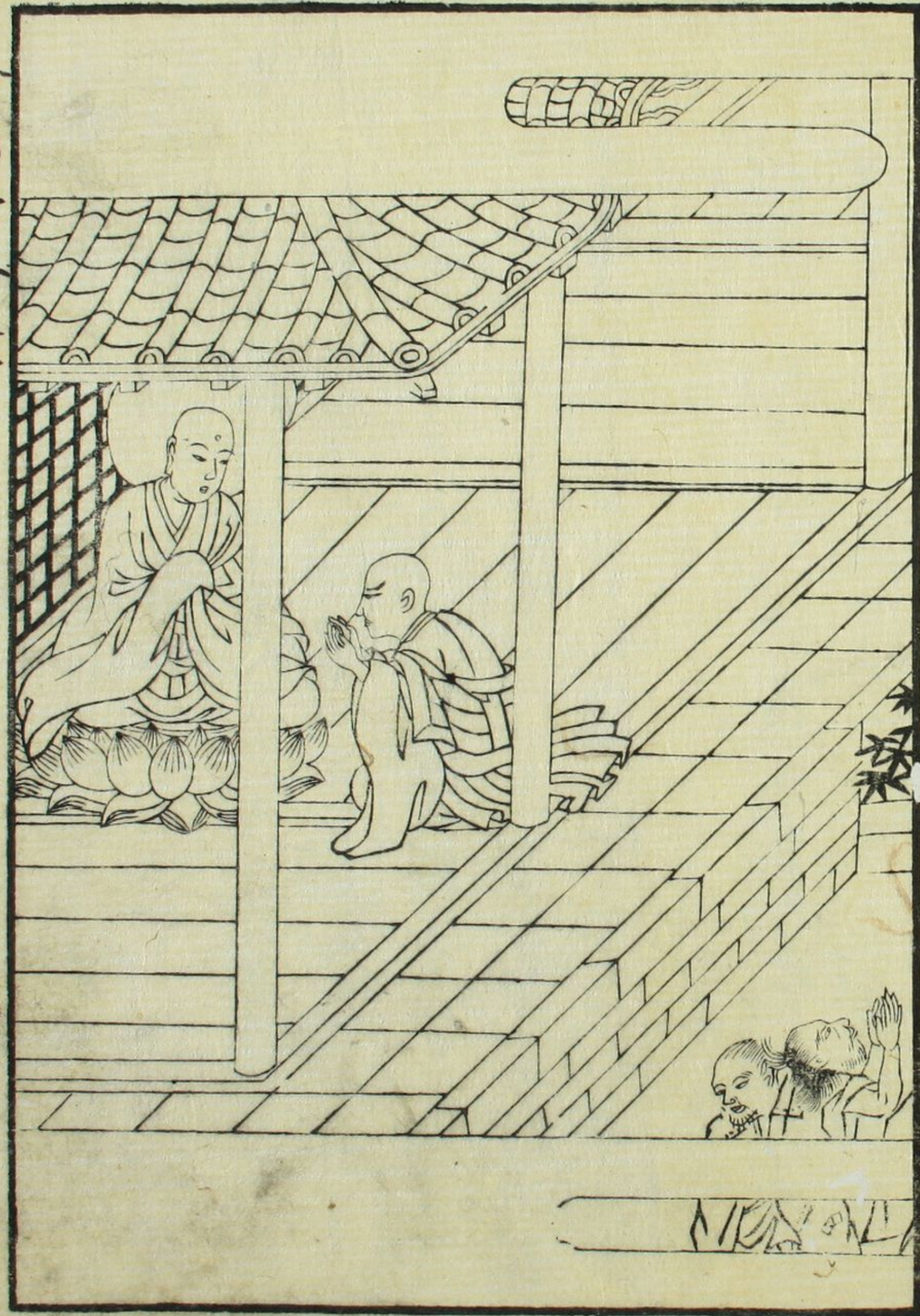
出づるなるなり練空今一夜一練を安きあり
門跡の美服何あせむし法衣もなう供奉の
人にも沖服さびりまは空き車は換て法に聖
光院一ゆりたる長哉昨日とて天台門主とて
綿の褥はなは豊う諸人拜趨の膝は屈せし
ふくまは孤獨の寮門に成なりしと麻の衣は中
は厚くまは系の席に沖服法衣をせり法練無
深の心わりまは又頼もたうとせしは是深
のありわたりた神は事危はまらふて沖法は
先服はなはるるにせたまはるる



既ニ宿願はたさるゝ世は道と室の門は
入るゝも六角堂百日の無誓にも後ぞん相
徳で無ん毎日糸指の歩はともびあふれ
四月五日の夜寅刻中へはれりあま差の中
ニ救世大菩薩教容端改の傍形と示現一
白納の御加賀装は服着せぬ廣大の白蓮
瑞座しふひてきくのことなり

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯
一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂

この文は浦上純とて云くは久の誓願也
汝は文の之れと一切群生に説くむす
爾時及中ふわりおと御堂の正面
東方は見ふとて誠なる山にりその
山に教千万億の有情群集より生命の
とくに世文の之れとて教千万の有情
むしむれと説くむしむる是く及ふた
まひぬとていふもゆくりとていふた
とん

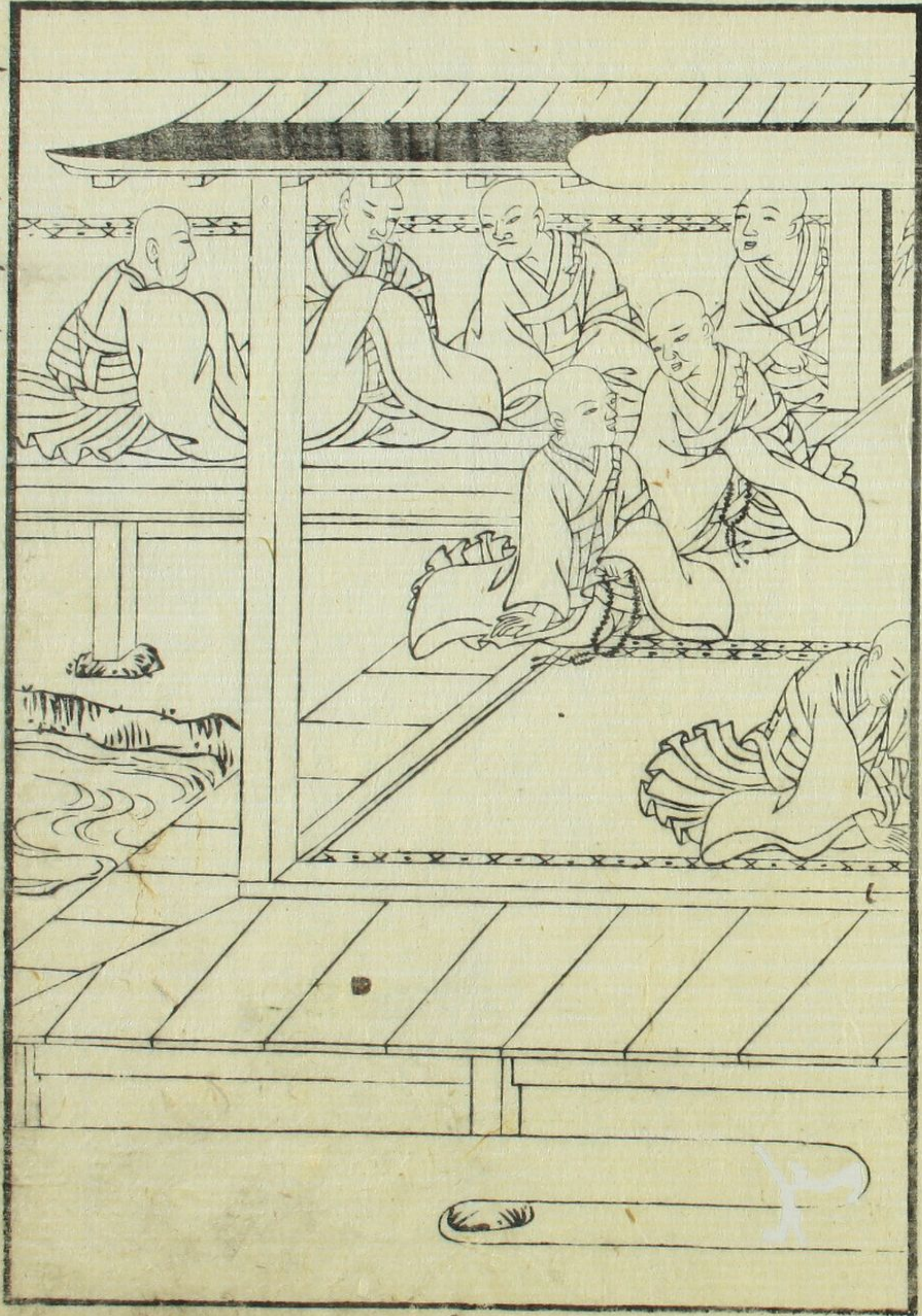


おろしき年十月之旬月輪殿下兼實公在氷の
孫坊よりたすんでりりもなやん沖法談
ましく心殿下ゆきて曰沖門身はまこの中
多くは清の智徳の僧侶形小兼實は在家なり
聖の念佛と在家の念佛とをかりめやいざと聖
人言てのたまりて人の聖道自力門の念なり他力津
土門の趣は十方衆生を普してお家を家の海を
く一切を悉凡夫得生を釋して持戒無戒の撰も
形一智の冲範あるべしと云く殿下又宜く地は冲
子の中生まれ乃法信と一人賜て妻帯しそ

在家往生の龜鑑は物人こそめりて聖人財も痛と
すべし細くまじり練室とあり殿下の作は後い
る處しめたまは練室のありしむる事よまじり
只取とまじりけやく心と練室も隨ありけり
くまて辰はしむしが良かりて隨たまりて日れ父母
普賢の家はかゝ慈園和尚の室へ入りて釋門の
負よ成ぬ又天台の門室は通して今一向の東門と
成心師の知は示也然に教百人の冲弟子乃
中よ己心り撰きて今の作と慕るの佛天も我
派於りし面自りしきとて墨深の神はまじり

於中よん入るる雪人宜く主歎然と云ふ是下
 沖坊のこし夏之初に救世菩薩の靈名は蒙た
 ずよ此や深空前よりこれと云ふまじり今の眼
 の親なる向くはしきたる人だれしとの禪退
 わふと云ふばして現世よせかり四句の昔又は自
 事記しとて指おしたまふ一字一息も遠ざりは色
 ば緯室大よおらきあひの沖舟子達も比
 一月よ驚嘆してわらん緯室沖房はいふる佛
 菩薩の化迹なりやと云ふやぬ人もありたり現師
 の指揮るる如く聖是位室の人も強にいさめ勅め

之に敏下もたはなほ屋をて同車して還所へひ五
 條の院の沖所は接しいとわらう十八歳に成
 り玉日姫とて息女に配嫁しよる元元と云ふこ
 ちの長孫の沖屋室もまじりゆきりはりくこまは
 只よ月輪敏下は九丈養生の産は変定せんが為
 又紅園鐘委の賢娘は産月して貧道黒夜の早
 婦と解大師中へ跡絶起世の利物は弘通せんが
 乃に相承と是の言ふ牙はかして在家養生乃
 先述よ備あう竊まことと接する一人は色辨至菩薩の
 徳にふれ一人何れも悪人には悔むは善所方便と信お下





あつら年の正月十七日青蓮院へ歩ゆくと
平山慈園和尚一目沙汰とて涙よそ
よのち宣つた緯空も指す心むきて涙泣
く人習わりく和尚のたまりく学同とい
ふ倭寺の巻く北岳の龍象我山の寶
くも流るる心くもの涙わらきぬ東門と
して見むく世悲しくまよふのまよふか離
る役の道よ入るよ事悲の中の悦也と
沖機條とるるり緯空も去る年
禁裏和尚の沖使の事より始て心底

る心くく世をよむ心一あると僧正の許
浄るく心く

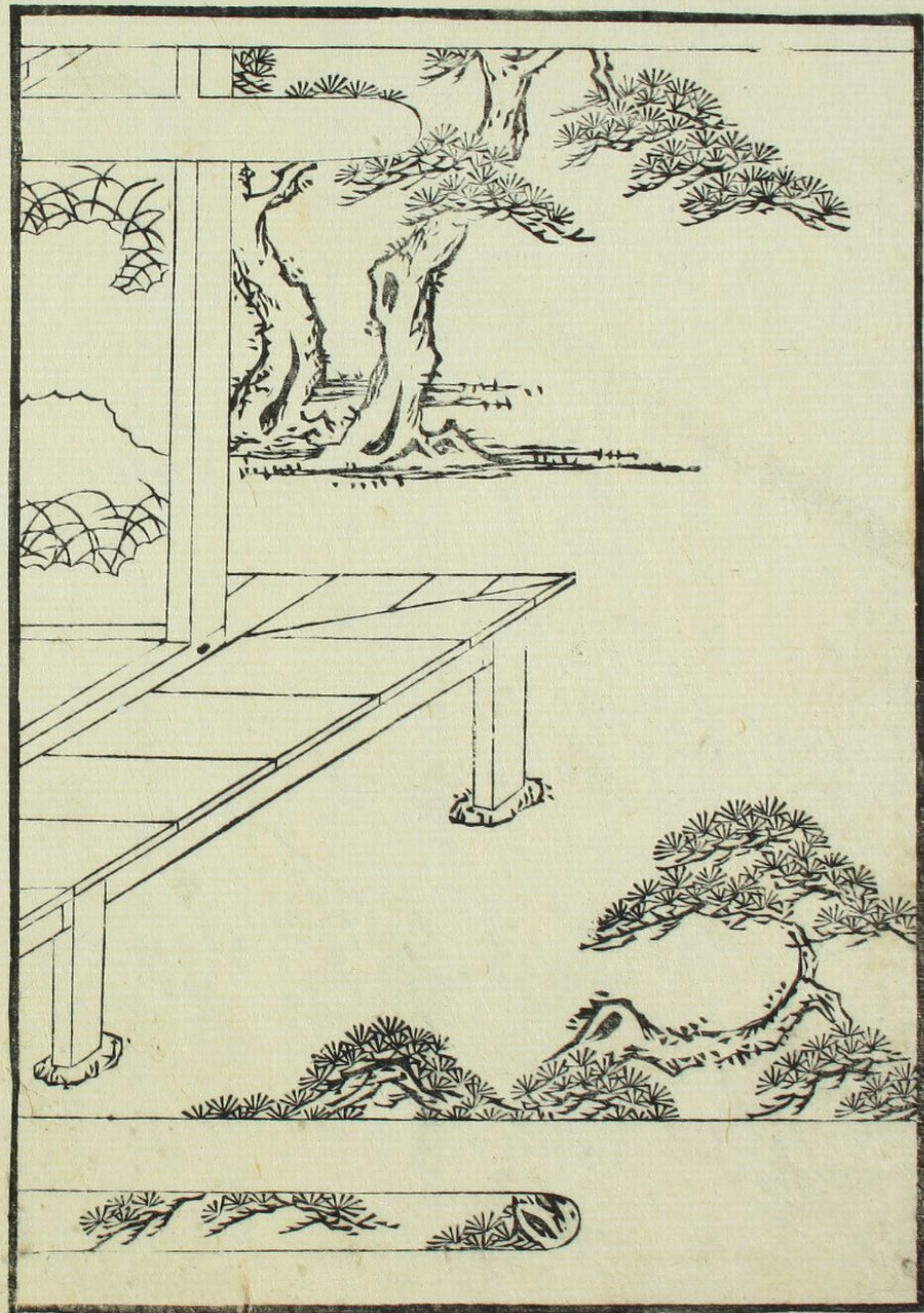
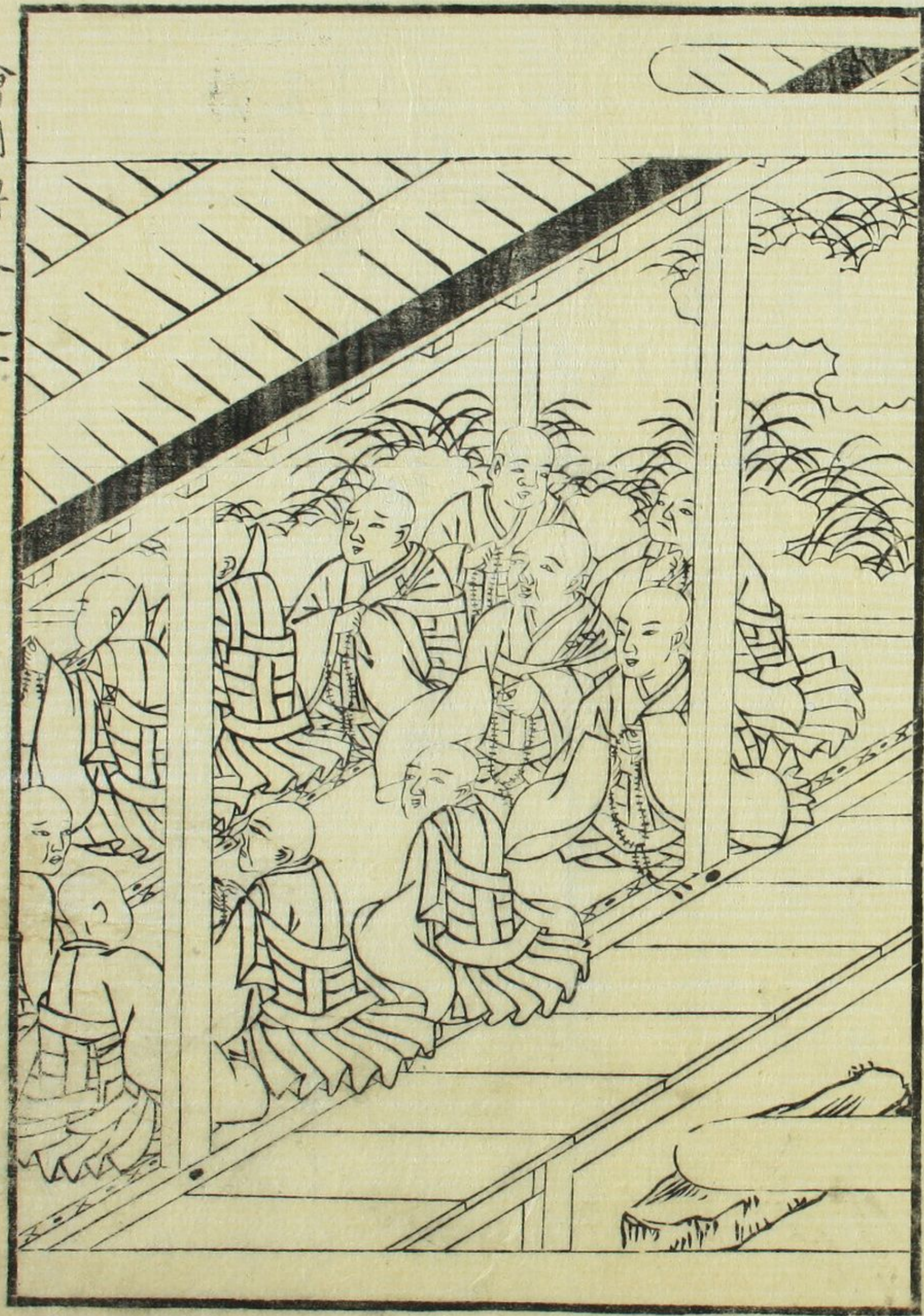


我まきしり又聖光院一冲入りて僧官候人等座
 して坐してして河江の聲を聞いて坐す又即
 日登山して無動寺の大乗院に入す又一寺
 の僧徒等奉りて欽命悲哀の聲ももぐんして
 厚方形一も夜の大乗院一宿也翌日三塔
 巡拜し又跡に根中堂山王宮よかいて終も
 ぶ後よ水多涌りり昨日のよきもまた是所の
 冲坊までうへてたすよ
 けりしき奉二月播州難波四天王寺に冲系流
 河又河州磯長電徒を子の冲廟よ二首三夜連続しり

由縁のせとて法隆寺よ冲系流り又逢僧坊の許
 又今寄居しり一夜多し此冲坊有明首河系
 志より傍りも奉行も根社まで下りり又四月五日
 六角堂よ系流しり冲通夜り天明すを多涌礼
 拜して感涙を沈み是等い去年去年の慶文の
 悲法報りたまりて聞えり
 日き二年十月十日男子誕生す角房丸と名づけ
 たり後よ乾意しり八月の三月十六日より慈園
 尚乃許よ呼り冲牙子と名づけり長の後印候
 と改名り天長院とすしり後よ隱道しり



建仁三年正月十八日あり三日三夜慧持の夜堂に於
 て不断念佛の列時法悦する身師の十八日の源空
 聖人十九日の慈圓大僧正廿日の聖賢法也
 徳高の聖賢法印聖信房湛空法蓮房徳
 空勢觀房源智念佛房合阿禪勝房遠阿法
 力房蓮生授智房性範正全房侍從聖人練
 空二十人なり源空聖人と慈圓僧正と法
 合せて十二人とす



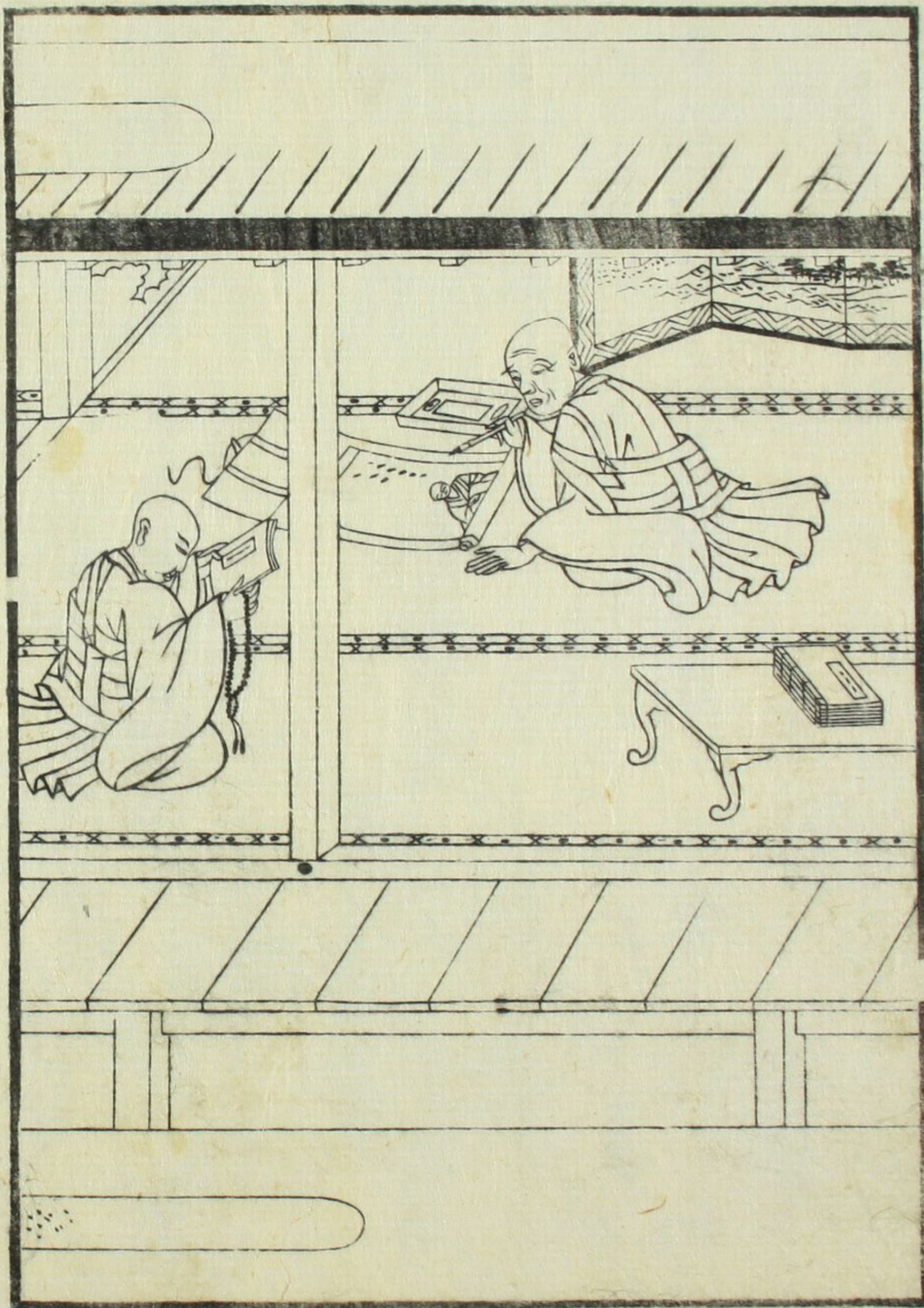
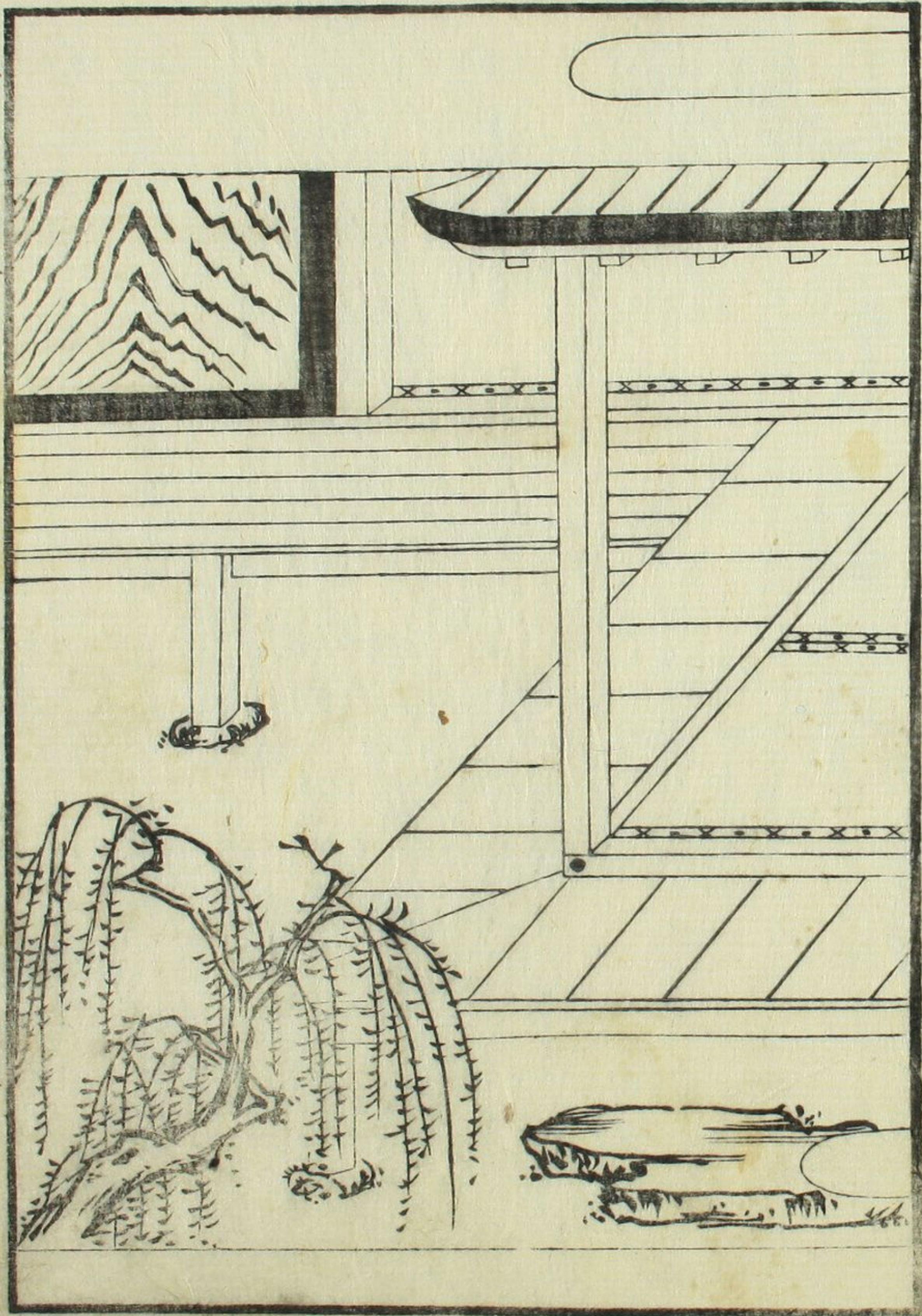
何くる年の三月より室町人の名代として一巻二巻
と緯室とかわるるぐ敷下の沖作一法談より新た
まよりき相承の安んよ聊も相違形さ事ら此紙を
ても勿ぬ也

元久二乙丑某沐生十日の著るこ小緯室より若水
の沖庵室より糸あふの抄り沖庵上人形一室町人
のたすらくそと御房に化力の法門に於て最上之法
形り我々撰集の秘書あり今これを授けり早く
寫りて勢に化んてさうべくとふりらまはる
らる所謂選撰本頭を佛集より緯室欽長より

何より頂戴するまして岡崎の庵より退きまき香乳
拜してむら書字より世に密約の旨何りく
内題と次の一初めの冊紙と垂て第一章の標目
より書始めたりり月中旬より功早りとふりら
何りそる後よせふては室町人業以流るる其内
題の字と並ぶ南无阿弥随佛往生之業念佛為本
と釋緯室と二十有餘の文字は書加ておけり
授與せしむるを又おびき日室町人の壽欽と号し
何ん事以頭よりた右形許したまひり
収てこまは圓畫しつひきま後国七月廿九日室

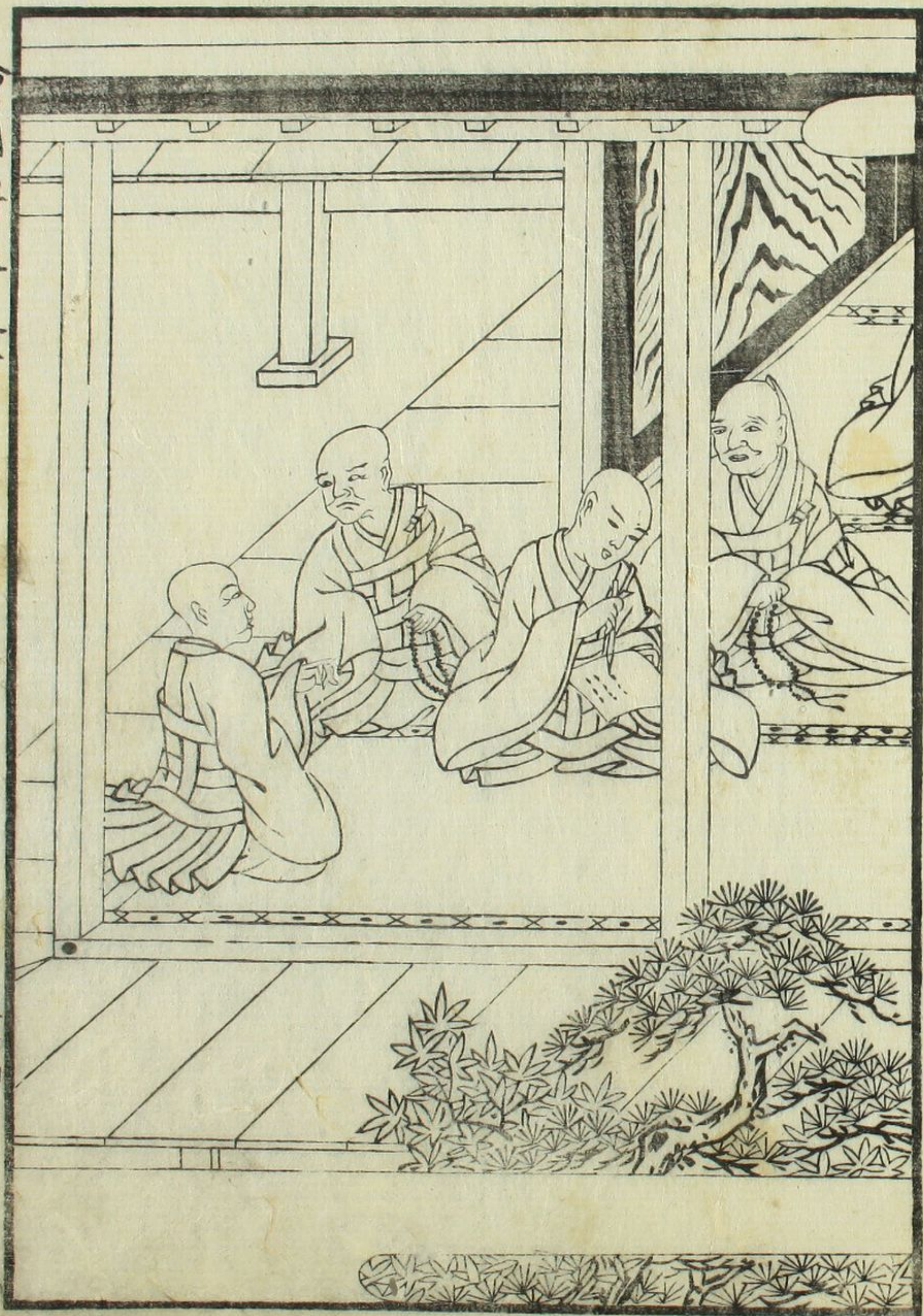
聖人より其筆法にて宗義相承の事状と云け
らるゝ時俾堂の名と改く右位房と云きあり是
ハ元年十九歳の時中座を子の若勅と云はれ
事依と云初く聖人治りな中てなり又師資相承
の沈摺のたに前よりたふと云く其教に聖人沖自筆
して南无阿弥陀佛若我成佛十方众生称我名号
ト云十聲若不生者不取正觉彼佛今現在世成
佛當念本誓重願不虛愿生称念必得往生の五十
四字の讚法に書くわふありかの印状の中へ念佛
沈摺のそめりて教に進んごころる是形り

そをもく 社選擇本願念佛集とりよの月輪開白
并實公の教命よりて選集せしめあり其宗の
肝要念佛の真義に採在歩入るもの諭やす
一誠より是希有な勝の華文無上甚深の宝
典なり法華法日蓮の海と云る人千万といへも
云親云疎この見写はるるの徒甚かろくは
既又製作と書写し其教と圖画は是專念
正業の徳也これ変定往生の志也と云悲
表乃涙よむせびふひりりと云



おふじき年九月五日信房空聖人より
たすりく教多の冲弟子達に付ても一師の教と
うけて日く往生不退と期と所也此と報
去得生の安心すく一形りやまこと矣なりや
面々の飲めと試く一定又變ゆせしめ生あ
朋友の睦ともかり者來同生せんより此
ねよる事つる危うくと聖人宜く減
これが意ふ叶なり明る人々集會の砌
あつたる危くして信不退の疾は
てんこの意を以て試すなり空聖人と中央

のふたふましく事法圓石信房を
執筆としてかこむに齊く又王時に大僧
却法平聖足法蓮房住空熊谷の蓮生
の信乃亦たはるまじりま條の人々の互に衣
と顧ては法懺りしうは信房自身法志
りて彼の府に名なきも人々を
のり大師聖人いさや源空も信乃亦不列
なりと意ひりまはる音の人々感の恥感
後悔の色法會ありまじりしなり

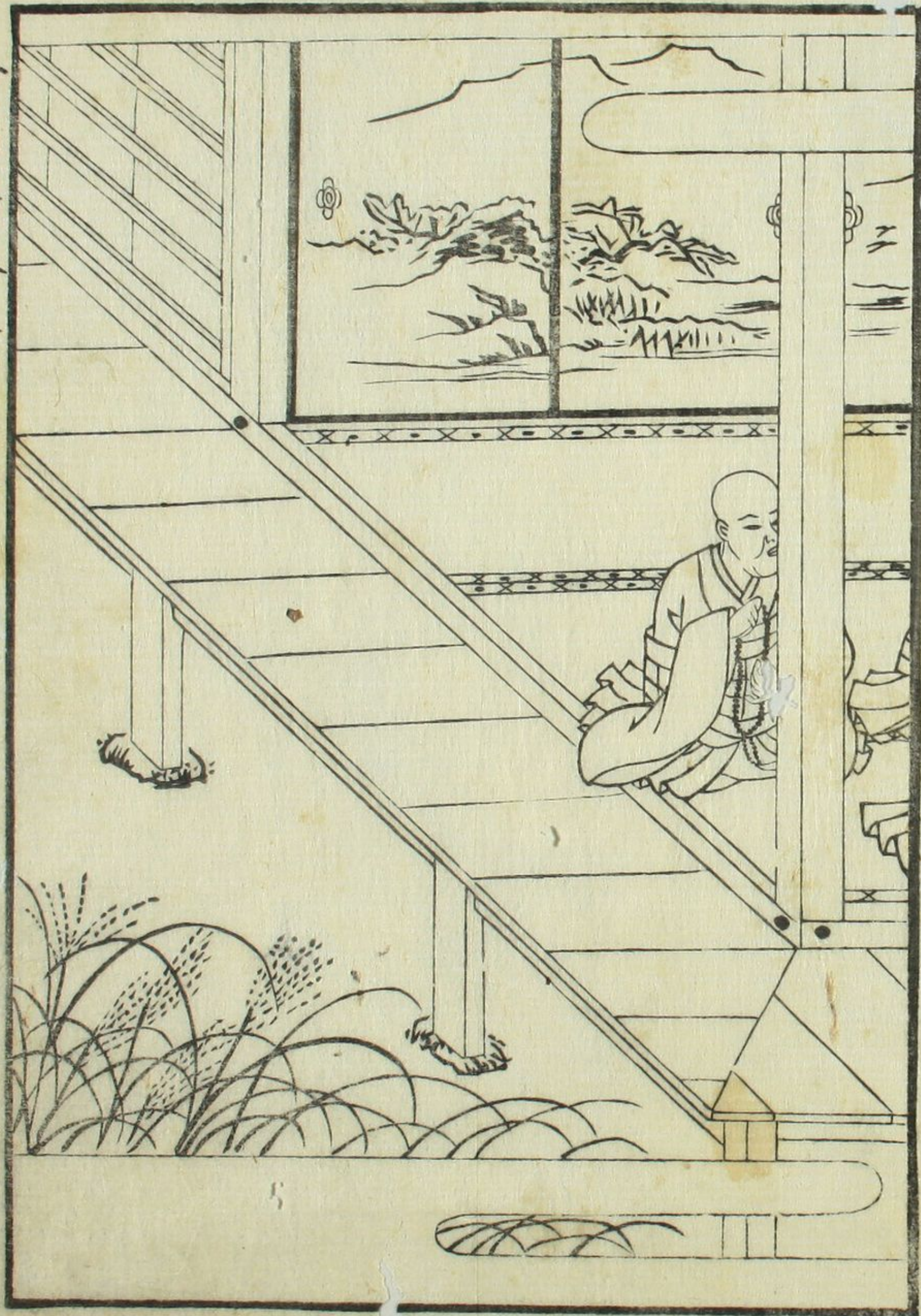


せきと六字の嘉号ハ万善圓備乃妙行す
て十方三世徳号の本ありがれ又末法五濁
の底生お離生死の方法性生降亡の大利
たごの一行為あり故よえ祖聖人専ら性生之
業念佛為本と勅進し多之ば人こそまに
称の名号氏業號とまごとも一變定し
て淨く願力の不思儀氏信ぜまごに機功と
くげむ自力の念佛こそ其の報亡の性生
ハ遂ごご一故又流祖亦人も信心けりこそ名
号氏とふ一まごの詮めり又一向よ名号と

少ありとも信心ありて性生まごご
うまご念佛性生く淨く信ぜまご名号
氏とふんずる疑ひなきと報亡の性生に
て有づくんちりとも一たまごなり必得
性生の勝益退失せざる事ハたご他力真
實の信心けり故よ又念佛けりて人の
信心と試まごなりなり

建永元丙寅年八月十六日石水より奉りて聖位房
湛空執親房源智念佛房益阿らされり
多うたす空物語の序より念佛房の云はく淨土に
死いた性生取とていふも凡夫の信心に減す如
し前より聖人の如きり信心得く慮形く付すと遂
危きやと云くこれとて一程の人こそか同意よりと
まきより三所長位房をり肯たすらばやとて自
身へもささひゆべ聖人の浄信なるの言位が信心
もかふる亦あづかべとて也とてたの人こととて云
長位房の詞いふ是形いごとく聖人の浄信なる及た

長位房をて云浄智恵學問に起りて信心よりさ
し持て起る事とていふる信力の位なる一とび其
ことより取取りしより今もねの信なり聖人の浄信
なり佛より賜ふせあひ信位が信心も如来より賜り
ぬ何条よりその有りて互にわらひしことと
る聖人仰てきて宣く自力の位より其智恵と
進ひて清涼のよりいふは信力の位より佛の
方より賜ふせたまふ位も我も人も皆下を賜て
あるの形なりとていふは信力の位より佛の
かへし佛心人の目か見えん淨土の事もあはれ



親鸞聖人繪詞傳卷一終

